

日々に

使命への召しに応えて

弟子として生きるために
役立つことと、内なる力



目次

大将による序文	4
大将による使命への召し	6、7
この本の使い方	8
はじめに	9
日々に ― 特権と祈り	11
いつも心に留めておくべき御言葉	11
 第1章 ― イエスからの召し	
イエスからの召し	13
神を知る	16
自分自身を知る	19
自分の使命を知る	22
 第2章 ― もっとはっきりと知る	
備えよう	25
祈り	26
聖潔 ^{きよめ}	29
戦う備え	33
 第3章 ― さらに愛する	
関わりをもち、取り組もう	37
奉仕	38
礼拝	42
確信	45
 第4章 ― もっと間近くつき従う	
任務を果たそう	49
すべての世代の人々を養い、育む	50
犠牲を伴う愛	54
すべてを包み込む	58
 第5章 ― 日々に	
出発点	62
距離	65
経験	68
終わりに	71
 注 及び 参考資料	74

救世軍大将によって
救世軍万国本営発行 ©2022 年

本書で引用している聖書の言葉及び聖書箇所は、日本聖書協会『新共同訳』を使用しています。なお、聖書引照では、聖書各書の略語を用いました。

大将による序文

神の御心^{みこころ}の中心にあるのは、ヨハネによる福音書 3 章 16 節にあるように、すべての人の救いのために働くという神のご計画を実行することです。これは皆に分け与えられた「召し」なのです。この自分が関わっていくという気持ち、目的をもつて生きることは、使徒言行録にある教会の始まりから今日に至るまで、隅の親石^{すみ おやいし}であり、それほどまでに「愛し」、「お与えになった」神が始められ、導いてこられた、推進力なのです。

神の召しは明確で直接的なものですが、愛する人々との和解を願う思いに導かれることがあることに、多くの人は同意するでしょう。それは神の御心から湧き出るものです。福音を心に留め、良いニュースを伝えることは、天の玉座^{ぎよくざ}から流れ下り、悔い改めて日々信仰をもって従っていくすべての人の心に届きます。聖書の教えに従って神と共に歩む私たちの「日々」の経験は、私たちが神との親しい交わりに導き入れ、神は御心を示してくださいます。それが「私たちの召し」という言葉に表されています。

あなたは、モーセの「燃える柴」による召しに気づいていることでしょう。パウロの「ダマスコへの道での召し」を読んだことがあるでしょう。あるいは、皆さんも私と同じように、神に圧倒されるような思いをもって、「主 われを愛す……」を確信し、毎朝、夜明けとともに、神の御心と御目的に気づく生活をしておられるのかもしれない。

救世軍における弟子—私たちはそれを兵士と呼びます—は、召しと、奉仕と、キリストの使命に加わる者として取り分けられているのです。「大将による使命への召し」(6 ページ)、また、『召されて兵士となる』と本書『日々に 使命への召しに答えて』という 2 冊の本の中に書かれている兵士というものの新しい視点は、救世軍人というものは救世軍の使命に結びついた者である、という単純なメッセージを伝えています。私たちはいつも備えができていますと宣言します。私たちはすでに関わりをもち、取り組んでいます—従順な信仰は目に

見えるものです。主の召しに「はい」と答え、自分の持ち場で**任務を果たします**。召された私たちはそれに応えるのです。

ロバート・ストリート中將はこの本の中で、「大将による使命への召し」を取り上げ、それを一人ひとりのものとされました。救世軍に対して世界各地から手助けを求める声がありますが、兵士たちが立ち上がって（備えをし）、踏み出して（仕える用意をして） いかないならば、私たちの足も手も声も役に立ちません。

救世軍が立っていけるのは、神によって正しくされた心によります。困難の中で辞めてしまうのではなく、神の恵みによって前進し、良いニュースを運び、暗闇の中に光を輝かせ、世界の不義に挑戦していくことが大切なのです。

この本を読んで、神の召しの声を聞いてください。『召されて兵士となる』も合わせて読んでください。聖書を読んで神の御声^{みこえ}を聞き、パウロの言葉に励ましを受けてください。「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい (エフェソ 4:1)。神の召し^{しょうじ}が成就^{じゆうじゆ}するのは、私たち一人ひとりが、日々、神が望んでおられる者として生きていくことにあると信じています。

Brian Peckelle

大将 ブライアン・ペドル 2021 年 2 月



「私は、
神の召しに応えるために、
活気に満ち、
熱心さに溢れた軍隊を
導いていきたい。」

▶ 備えよう

祈りへの召し：神はその民が自分を明け渡して、祈ることを求めておられます。霊の戦いに加わり、勝ちを得るためには、ひざまずいて祈らなければなりません。

聖潔への召し：聖潔が私たちの人間性を回復し、神と、他の人々と、この世界との私たちの関係を回復することを覚えて、生活のあらゆる面でキリストに似た者として生きることが大切です。救世軍人は聖書の教えが正しいものであることを日々の生活で表していくのです。

今、戦う備えをせよとの召し：「今」という言葉の緊急性を理解しなければなりません。私たちの世界は、今日、キリストを必要としています。私たちが自分のプランを実現した後で、ではないのです。現在、私たちの働きの中で成さねばならないことはたくさんありますが、私たちが成長し、決意を固め、更なる戦いに備える間にも、戦いは続けなければならないのです。

大將による使命への召し

THE GENERAL'S
call to mission
BE READY BE ENGAGED TAKE RESPONSIBILITY

▶ 関わりをもち、取り組もう

奉仕への召し：私たちが使命の中で最優先すべきことは、他の人々に仕えることです。士官、下士官、兵士、同友者、ジュニア・ソルジャーなどを大切に思うとともに、救世軍で働いている多くの人々やボランティアが、救世軍の働きにとって鍵となる人々であることを忘れてはなりません。

礼拝への召し：私たちは礼拝を通して、神の^{あがな}贖いの愛に感謝を^{ささ}げます。また、もっと多くの人々に手を差し伸べ、歓迎し、共に賛美と感謝を献げるために、その土地の文化にふさわしい方法を用います。

福音を確信することへの召し：福音の良いニュースを分かち合うとき、福音には人を救い、人を造りかえる力があることを認めなければなりません。人々は神から与えられている可能性に到達することを妨げるすべてのものから、聖霊の力によって自由にされるのです。

▶ 任務を果たそう

すべての世代の人々を養い、育むことへの召し：私たちは子どもたち、青年たち、若い指導者たちに対して責任をもたなければなりません。現在と将来の救世軍のために、彼らを備えさせ、育て、力づけ、訓練することが大切です。

犠牲を伴う愛への召し：私たちは他の人々を守り、正義を求め、寛大に振る舞い、救い出す活動に参加しなければなりません。

すべてを包み込むようにとの召し：私たちは、キリストの名によって人々の必要に応える使命に、いかなる差別もあってはならないことを覚えて、すべての人に尊敬の心と愛をもって対応し、その点で非難されることがあってはなりません。



この本の使い方

この本は、イエスにどのように従っていくか、自分ならどういう選択をするかに重点を置いています。その経験や使命を他の人と分かち合うことの大切さも示しています。この両面を心に留めて、この本を読むとよいでしょう。「考えよう」の箇所では、自分で考えたり、グループで考えたりするようになっています。「こうなりたい」、「こうしよう」の実行の面でも、自分で考え、グループで考えるようになっています。変動の多いこの時代に、私たちが使命を果たすためにどうしたらいいかを共に考えるグループや小隊にとって、この本は有益であると考えます。

この本を読み進めていく中で、自分の弟子としての生活の中に应用すべきことと、内なる力を見いだすことができますように。

はじめに

神が望まれるわたしたちになる

「私たちがどうしたら使命にふさわしい者になれるかということより、もっと重要なのは、自分の心を神によって正しくされることです。」

大將は、救世軍に「使命への召し」の声をかけました。これこそ救世軍です。救世軍の存在意義はそれです。使命がなければ救世軍は救世軍ではありません。救世軍は使命をもった宣教団体です。普遍的教会（ユニバーサル・チャーチ）の一部なのです^{*1}。

前述のように「大將による使命への召し」には、9つの召しがあります。それらは明瞭であり、それぞれの挑戦を示します。この本は、それらに対する個人的な応答の仕方を述べています。召しについては前後関係や、弟子となることに関連して書かれています。他の弟子たちとの結びつきから得られる一致や力についても述べますが、イエスに従うことは自分自身が選ぶことであるという点は揺らぎません。どのような計画が立てられようと、どんなキャンペーン、着想、大会が用意されようと、使命が実行されるのは、毎日の生活の中で、自分のいる所で、自分自身の中で、神が私たちになってほしいと望んでおられる者にしてください、と祈るところから始まるのです。私たちが神につく者となり、その使命を果たすためには、神に形づくっていただくことが大切です。私たちが使命にふさわしい者となるために最も大切なことは、私たちの心を神によって正しくしていただくことなのです。

使命を果たすための世界は、急激に変化しています。制御不可能と思える状態なのです。しばしば対立があり、ことにある状況下ではひどい状態です。地球の文化や社会が、自分たち以外の考え方に対して偏狭になり、敵対しています。イエスから私たちは、「神は…世を愛された」ことを学びます。神の御心はすべての人のためです。私たちの使命はすべての人のためです。障壁を壊し、理解を深め、希望と癒しをもたらすのです。イエスがなさったようにです。

2020年の新型コロナウイルス感染症の蔓延は私たちの生活に大きな影響を与えました。自分ではどうすることもできない困難の中で、考えなければならま

せんでした。世界を見る目、私たちが何者であるか、何をするのか、なぜするのか、考え直さざるを得ませんでした。この本で、このような状況に、増大する挑戦に、どう応答すべきかを共に考えていきたいと思います。

ブライアン・ペドル大將は、ロックダウンや通常の活動ができなくなっている状況を、「一息つく」機会として用いるようにと私たちを励ましています。この本も同じです。熟考し、思い巡らし、分析する機会を提供します。そして、日々、イエスに従っていくのです。

日々に —特権と祈り

イエスからの召しは生涯を通してのものです。短期の計画ではなく、臨時の約束でもありません。気持ち半分でこなしたり、自分が選んだことだけする、そういうものではありません。イエスからの召しは神ご自身からのものであり、生涯を通して神と共に歩むことです。どのような特権にもまさる特権です。

生涯を通してとなると、ひるんでしまいそうですが、主の守りの中で1日ずつ、主の導きを信じて進むようにと、イエスは言っておられます。そうすることは、どこへ導かれていくのか私たちにはわからないということです。地図はありませんし、その先にどのような冒険があるのかもわかりません。でもその代わりに、私たちには約束、保証が与えられています。今日一日、ついて行きなさい。明日の心配はイエスがしてくださいます(マタイ 6:33, 34)。一日、一日です。

聖リチャードの祈りから

恵み深い^{あがな}贖い主^{ぬし}、友であり兄弟である方よ、
日々に
あなたをもっとはっきりと知り、
もっと心から愛し、
もっと近くにつき従うことができますように。
アーメン

いつも心に留めておくべき^{みことば}御言葉

毎日、備えていなさい

「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、
いつでも弁明できるように備えていなさい。」

(ペトロ 3:15)

第1章 イエスからの 召し

「イエスからの召しは万人に共通のものですが、
非常に個人的なものです。」



イエスからの召し

イエスからの召しは万人に共通のものです。非常に個人的なものです。私たちはそれぞれ招きを受け、旅する道、自分の立ち向かうべき冒険を与えられます。そしてそれを受けるか、受けないかの選択も託されています。

イエスからの召しは他の多くの人々にも与えられます。私たちだけではないのです。数えきれないほどの多くの人々が召しを受け、お互いに支え合います。しかし私たちはそれぞれ、個人的に応答をしていきます。

イエスからの召しは、使命への召しです。イエスの最初の弟子たちはこのことをよく承知していました。イエスは言われました。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」(マルコ 1:17) なすべき仕事とその目的があったのです。

イエスからの召しは導かれていくものです。「ついて来なさい」の御言葉が初めに来ます。最も重要なのは、自分の生涯をイエスによって導いていただこうと委ねることです。イエスの道を歩み、イエスが教えてくださるとおりに行い、イエスの模範から学ぶことです。要するに、第一の目的はイエスに似た者となることなのです。まず、イエスを、そしてイエスのメッセージを、私たちの心に受け入れられないならば、その使命に心から携わることはできないのです。

イエスを信じ、イエスがどのような方であるかを確信しないなら、他の人々への働きかけに力はいりません。出だしからつまづいてしまいます。幸いなことに、私たちがイエスに近づいてついて行くなれば、イエスはご自身とその御約束をさらに示してくださるのです。

これらのことを心に留めて、救世軍士官たちはその訓練の中心に次の3つの目標を掲げています。

1. 神を知る
2. 自分自身を知る
3. 自分の使命を知る

これらの目標は要点をはっきりさせてくれます。イエスについて行きたい、その御心を行いたいと願うすべての人にとって、わかりやすく、基本となるものです。

この本を読み進めるうちに、これらの目標についてさらに詳しく知ることになります。これらの目標は、私たちが役に立つ忠実な弟子、イエスを証ししていく者となり、イエスがどんな方か、イエスだけが私たちを変えてくださる、イエスが私たちに何をせよと言っておられるかを正しく映し出す者となることを、手助けしてくれるのです。

考えよう

「私たちはそれぞれ招きを受け、旅する道、自分の立ち向かうべき冒険を与えられます。それを受けるか、受けないかの選択も託されています。」

「最も重要なのは、自分の生涯をイエスによって導いていただこうと委ねることです。」

「まず、イエスを、そしてイエスのメッセージを、私たちの心に受け入れられないならば、その使命に心から携わることはできないのです。」

こうなりたい
応答する



こうしたい
日々、イエスに従う。

神を知る

使徒パウロは賢い人でした。高い教育を受け、立派な職業に就き、規則をよく守り、尊敬されていました。彼はすべてを手に入れたように見えました。ところがある日、今までとは違った見方ですべてのことを見るようになりました。本当に大切なことは何か、それがわかるようになったのです。それはイエスに出会った日に起こりました。ダマスコへの道での経験でした(使徒9章)。その経験は彼の人生を全く変えてしまったので、何年か後に彼は、イエスを知ることのすばらしさに比べれば、以前に積み重ねた業績は塵あくだと言っているのです(フィリピ3:7~11)。彼の応答は個人的なものであり、完全なものでした。

私たちもそのように感じるでしょうか。イエスを知ることが、私たちのその他の関係や野心を築き上げる基盤の中で、第一の優先事項となっているでしょうか。もしそうでないなら、神の御心を知り、神がどういう方で、神が私たちにどのような計画をもっておられるかを知ることとはとても大切です。

ある意味で、神を知ることは難しいことです(イザヤ55:8,9)。神は私たちの理解をはるかに超えた方です。時には自分は神よりもっとよく知っていると思うような時があるかもしれませんが、実際には何が神を神としているかを知ることにはできないのです。

しかし神は、私たちと関わりをもちたい、自分のことを知ってもらいたい、と願っておられるのです(ヨハネ14:23)。このメッセージは聖書にあふれており、神がイエスにあって人となり、私たちの間に宿られ、神がどのような方であるかを示された(ヨハネ1:14)ことからはっきりわかります。イエスの誕生のへりくだった姿、人々を教え、関わりをもたれたことは、神がどのような方であるかを明確に示しています。イエスが私たちに語られたことから、神は私たちのためにおられる、愛の方で、いつも心に掛けていてくださることがわかるのです^{※1}。

神にとっては関係をもつことが大切なのです。質問されたイエスがお認めになった、最も大切な2つの命令は、関係性についてでした。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、

隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ10:27)。私たちが神とそのご性質、考えなどを知りたいと思う時、これらの命令がそれを教えてくれます。それらは明瞭で、明確であり、救世軍では、「心は神に 手は人に」というモットーにしています。救世軍の使命が間違っていないことを示しています。

関係性には2つの面があります。私たちには果たすべき面があります。心からイエス・キリストを知りたいと思うなら、イエスに心を開きます。それが唯一の、満足のいく、効果的な方法です。隠し事は一切いけません。自分をごまかしてはなりません。不都合な真実を避けて通ってはなりません。他の人々と共に住めば、その人々を知るようになります。真実が理論や仮定に取って代わります。神との関係も同じです。私たちが神をお招きすれば、神は私たちと共にどこへでも行ってくださいます。ある所までという限界はありません。すべてのことを一緒にしてくださいます。時間をとって、特別にお話することが重要であると、付け加えましょう。よく聴いて、よく考える時間をもつことによって、理解はさらに深まります。

神を知るということは、一步一步進んでいく、冒険なのです。神を知れば知るほど、学ぶべきことが増え、知らなかったことが多くあることに気づきます。このことは、聖書についての知識や理解を含めて、ほかの分野にも当てはまります。こういう限界に気づくことは、とても大切です。本当はそうでないのに、神の御心を十分理解しているなどと考えるなら、混乱や、誤解、幻滅に陥ります。

一方、このことは、私たちが何をしようとしまいと、すでに神は私たちのことを完全に知っておられるということを受け入れやすくしてくれます。神が私たちに最善を望んでおられることに変わりはないのです。地上に來られたイエスの犠牲的な働きは、神が私たちのために働いてくださり、私たちに最善のものを与えようとしておられことを示しています。神は愛であり、私たちがその愛を受ける者である、と示しているのです(ヨハネ4:10)。神が私たちを困った者たちだと思っておられるのではなく、祝福すべき者たちだと思っておられることを知ると、私たちは自分自身を知るといふ、次のステップに進むことができます。

考えよう

「イエスを知ることが、私たちのその他の関係や野心を築き上げる基盤の中で、第一の優先事項となっているでしょうか。」

「神を知れば知るほど、学ぶべきことが増え、知らなかったことが多くあることに気づきます。」

「このことは、私たちが何をしようとしまいと、すでに神は私たちのことを完全に知っておられるということを受け入れやすくしてくれます。神が私たちに最善を望んでおられることに変わりはないのです。」

こうなりたい
関係性をもつ



こうしたい

神が私たちと関わりをもちたいと願っておられるのはなぜか、考えてみよう。

自分自身を知る

古代の哲学者プラトンは、考えることをしない人生は、生きる価値がない、と論じたと言われます^{*1}。何が彼にこのような結論を出させたかはさておき、私たちはよく吟味してみなければ、自分自身が何者かを知ることが難しいのです。

私たちは何を調べなければならないのでしょうか。そのリストは長いのですが、私たちの動機、心構え、自分がここにいるのはなぜかなど、自分の生きていることについて考えるのです。

動機は、誠実さがあるかないかを明らかにします。動機は、私たちが物事を正しい理由でしているかどうかを示します。他の人々の益のために動いているか。自分の夢の実現の手段として、自分の満足のために、動いていないか。人間は複雑な生き物だから、全く純粋な動機というものなどあるだろうか、と議論は続きます^{*2}。しかし、ダビデのように神に清い心を与えてくださいと願うこと（詩編 51:12）は、純粋な動機を育てるための確かな道です。正しい動機を育てるためには、いつも心を開いて神の御心を受け止め、自分の考えや「夢」にとらわれないことです。

私たちの心構え、態度は、すべてに影響を与え、また、私たちが何を考えているかを表します。パウロはイエスと同じ心構えをもつようにと勧めています（フィリピ 2:5）。自分をひけらかすのではなく、他の人に仕えるようにと。賞賛を求めず、神に従っているから神に特に愛されるなどと考えないことです。正しい心構えは、他の人々がいる所で、その人々がどんな人々であろうと、そのまま出会い、受け入れることです。それは他の人々が私たちを豊かにし、私たちの生活に貢献してくれることを受け止めるということです。一人ひとりが神の像に造られたのですから、私たちはすべての人を尊ぶのです。私たちは皆、神の子です。えこひいきされる人は一人もいません。ですから、他の人より自分が偉いという態度はあり得ないのです。

私たちが何のためにここにいるかを理解すれば、神から与えられたメッセージの伝え方が変わってきます。まず、それは私たちのメッセージではないことを覚えましょう。私たちがそれをつくり上げたものではありません。私たちはそれ

を受けるに価する者ではありません。それは私たちのものではありません。実際のところ、私たちが助けようとしている人々と同じように、私たちもそれをいただく者なのです。自分の分を果たすべき場所を心得ているということは、命令のように聞こえるかもしれませんが、私たちが見落としやすいことです。自分がどのように貢献しているかを過大評価すると、確信を得られなくなります。それはまだまだ自分自身を知らないということなのです。

自分自身を知るための学びのコースはたくさんあります。性格、好み、得意なこと、直感力、自分に欠けているもの、物事にどのように反応するか、なぜ反応するか、等々。これに加えて、信頼できる友人、または、友人たちの評価が、自分自身をさらによく理解する手助けをしてくれることでしょう。批判を受け入れることは、成熟しているしるしですが、どういう人たちが批判しているかを注意することが大切です。イエスは「真珠を豚に投げる」(マタイ7:6) ことには注意するようと言われます。言い換えれば、特権を乱用したり、情報を誤ったやり方で使う人々に、自分が大切にしていることを知らせてはならないということです。そういうことは自分自身と自分の対応について学ぶ方法の一つかもしれませんが、不必要に傷ついたり、害されたりしないために、慎重に振る舞うべきです。

詩編の作者は、さらに自分自身を知る最も安全で確かな道を示しています。「神よ、わたしを究め^{きわ} わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。御覧ください わたしの内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしを とこしえの道に導いてください」(詩編 139:23、24)。これは私たちが始めなければならない探求です。心を込めて探求し、そこで気づいたことを心を開いて受け入れましょう。

考えよう

「正しい動機を育てるためには、いつも心を開いて神の御心を受け止め、自分の考えや『夢』にとらわれないことです。」

「賞賛を求めず、神に従っているから神に特に愛されるなどと考えないことです。」

「自分がどのように貢献しているかを過大評価すると、確信を得られなくなります。それはまだまだ自分自身を知らないということなのです。」

こうなりたい
神に心を開く



こうしたい

自分がどういう者になっているか、なぜそうなったのか、時間をとって考えてみよう。

自分の使命を知る

人生の目的を知っていることは幸せです。自分のすることに確信をもち、自分の使命が何であるかを知ることが、当たり前のことではありません。すべての人がそれを見いだすとは言えませんし、そんなことに全く関心のない人々もいるからです。自分の使命に献身し、人の益のために大きなことを成し遂げた人々を私たちは賞賛します。生涯をささげて医学、社会環境、正義、平和、食物供給、人類の益になる発明をした有名な人々などです。そういう人たちは貢献できたことに満足を覚え、達成感をもちます。

私たちの多くは、それぞれが置かれたところで、もっと普通の生活をしています。世の中を変えようとか、有名になろうとかは、あまり考えません。そうだからと言って、私たちには価値のある、効果的な貢献ができないということではありません。ですから、人生は冒険などではない、ということではないのです。私たちには召しがない、使命がない、ということではないのです。神を愛し、人を愛するという使命が無駄になることは決してないのです。

イエスは私たちに、達成感を見いだすように、自分の生涯を有益なものとするようにと、招いておられます^{*1}。イエスの使命は、神と人を一つに結ぶことでした。良い関係性のためのドアを開き、障壁を打ち壊し、私たちがなり得る者、なるべき者、私たちがそうなるように神が望んでおられる者になるのを妨げている障害を取り除くことでした。イエスは地上に来られ、なすべきことをなさいました。今日、イエスの使命の恩恵を他の人々が受けることができる手助けをするために、イエスは私たちを招いておられるのです(マルコ 16:15、使徒 1:8)。

間違っていることを正すこと、病を撲滅^{ぼくめつ}すること、傷を癒^{いや}すこと、砕かれた人生をつくり直すことなど、なすべきことに限りはありません。ウィリアム・ブースが「私は戦う」と言って掲げたリストがありますが、現在も進行中の出来事、ケアを必要としている人々、私たちが関わりをもつべき人々は多くいるのです^{*2}。21世紀には昔とは異なった問題がありますが、根底においては昔と同じなのです。ジョン・ゴワンスは彼がつくった歌の折り返しの中で、こう言っています。「彼らは求めているよ きみを ぼくを イエスを」^{*3}。私たちは共に働くのです。

私たちの使命は、できるだけ多くの人々に、イエスには私たちを変える力があるということを伝えることです。イエスが自信をなくした人を立ち直らせ、さげすまれた人を立ち上げらせ、失敗を包み込み、弱い人を強め、ずっと昔に手放してしまった希望や信頼を取り戻してくださることを示すことです。使命における私たちの役割は、人々に正しい方角を示し、人々と共に歩み、彼らが自分でイエスを見いだすことができるよう手助けすることです。そうするには、イエスがなさったように、人々のいる所に出て行って彼らに出会うことが大切です。彼らの話に耳を傾けます。彼らがなぜそのように考えるのか、なぜそれが大切だと考えているのかを理解する時間が必要です。彼らが必要としていることが何であるかを知らないなら、彼らを理解することは難しくなります。

自我を抑制することも大切です。自分がよく知らないことについて、出すぎた物言いをしないことが大切です。いつも私たちの主から学ぶようにしましょう。福音には力があり、人生を変えてくれるものですが、真理と、理解と、謙遜^{けんそん}をもって伝えるのでないなら、福音を傷つけることになります。

手助けをしてあげたいと思う人々をよく知るには、関心をもち、関わり、すぐ手を差し出してあげることが大切です。要するに、イエスがなさったやり方を見習うことです。イエスは自然体で神について話されました。失敗をした人々に、あなたたちは良くなれる、今までと違った自分に変えられるのだという思いをお与えになったのです^{*4}。彼らはそうなったのです。私たちの使命は、今日も主が同じことをしてくださる機会をつくり出すことです。

考えよう

「神を愛し、人を愛するという使命が無駄になることは決してないのです。」

「イエスは私たちに、達成感を見いだすように、自分の生涯を有益なものとするようにと、招いておられます。」

「使命における私たちの役割は、人々に正しい方角を示し、人々と共に歩み、彼らが自分でイエスを見いだすことができるよう手助けすることです。」

こうなりたい
気づく



こうしたい
イエスの使命の中心にあるもの
が何かを知る。

第2章 もっとはっきりと 知る

備えよう

「イエスを知ること、日々、イエスとの関係を大切に
し、深めていくことは、イエスの御名によってその使
命を行う備えをするための最善の道です。」



祈り

◆ **祈りへの召し**：神はその民が自分を明け渡し、祈ることを求めておられます。霊の戦いに加わり、勝ちを得るためには、ひざまずいて祈らなければなりません。

祈りは神と個人的につながることです。グループや会衆と共に祈ることがありますが、祈りは常に個人的なものです。祈る人と神との間で何が起こるのかは、他の誰にもわかりません。それは唯一無二のものです。それが貴重なものとなるか、無意味なものになるかは、その人の選択次第です。

祈りの方法は様々です。みんな異なっています。神はそれをご存じです。神は私たちを造られたので、私たちとつながる方法をご存じです。神は愛に溢れた父であり、気軽に話しかけることができ、私たちの声を聞いてくださる方だ、とイエスは語られました(マタイ6:6)。イエスは祈りが個人的なものであることを示し、神が誰に対してもドアを開けていてくださることを教えてくださいました。

このことに人々がどう反応したかは書かれていません。旧約聖書では全能の神は父と呼ばれていますが^{※1}、イエスは、私たちが神に心を開き、私たちのどんな心配ごとでも聞く用意のある神に話すようにと、温かく励ましてくださいます。大家族の子どもが、時に自分と両親だけで過ごす時間を大切にするのと同じように、私たちも、一対一で神を知る喜びを経験することができるのです。

祈りには形式もあり、敬虔^{けいけん}で、聖なるものですが、実際は親密なものであり、関係性を発展させるものです。この関係性については山上の説教(マタイ5～7章)で語られています。この3つの章は、いくつかの理由で革命的なものです。その理由の一つは、どんな人でも、階級や立場に関係なく、神に直接近づくことができる、とイエスが言われたことです。この関係をもつために、誰かに頼る必要はありません。この関係のために、特別な儀式とか、典礼とか、教会の権威とか、祭司などは必要ではないのです^{※2}。それらは助けとなり支えとなりますが、イエスの教えの中では「欠くことのできない」立場を与えられてはいないのです。これはしばしば見落とされることです。私たちは神との特別で、個人的な、つながりをもつことができるのです(フィリピ4:5～7)。

マタイ7章7～11節に、イエスが、私たちが父なる神に「良い物」—私たちをもっと良い人にしてくださるものを求めるように、と話された記録があります。今日、「主の祈り」(マタイ6:9～13)と呼ぶものをイエスが与えてくださった時、「御心が行われますように」と祈るようにとされました。そうすることによって、私たちが自分勝手な要求をしないように、祈りの目的がどんなものかをさらに理解できるようにと導いてくださるのです。

私たちが祈ったことに神が答えてくださったかどうか、考えてみるとときがあるかもしれません。それを調べるのはたやすいことではありません。浅はかな結論にたどり着くこともありますし、時には、私たちの願いについて、神はずっと深い理解をもっておられ、私たちが願う前から私たちの求めを神は知っておられる(マタイ6:8)ということを見過ごしてしまうことがあるのです。私たちがここにいるのは、神を説得するためではありません。また、子どものように「あなたは約束してくださったじゃありませんか」と神に食ってかかったり、愛をもって向き合ってくださいる神に抗議をするような、過ちを犯すこともあります。

山上の説教は私たちの他の人との関係についても語っています。イエスはこう言われます。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイ7:12) 最近の調査で、多くのクリスチャンは身近な人々のためにより多く祈り、そして自分自身の必要のために祈る、という結果が出ています。イエスも私たちが他の人々のために祈ることを望んでおられます。そうすることで私たちは豊かにされます。特定の人々や状況を祈りの課題として熱心に祈る人、その無私の心は大きな力となります。このような心を込めた祈りを、次世代の人々が受け継ぎ、私たちも大切にしていきたいのです。

分かち合う祈りは、私たちを結びつけ、力づけます。その祈りは基督教の信仰と交わりを築き上げる力であり、とても貴重なものです(使徒2:1)。

祈りには様々な要素があります。崇拜^{すうはい}、とりなし、賛美、悔い改め、願い事、その他の数々。最も素晴らしいのは、神の御前に自分を明け渡すことです。カントベリー大主教ローワン・ウィリアムズが言ったように、祈りは「自分の心に

神を迎え入れ、共に住んでいただくこと」なのです^{*3}。

「ひざまずいて」時間をとって祈ること、神がいつも共にいてくださることを知って日々を生きることによって、この経験が自分のものとなります。神は私たちと共にあり、私たちに励まし、導き、力づけ、分かち合ってください。戦わなければならないと思う時にも、神の助けを得て戦うことができるのです。

考えよう

「祈る人と神との間で何が起こるのかは、他の誰にもわかりません。それは唯一無二のものです。それが貴重なものとなるか、無意味なものになるかは、その人の選択次第です。」

「私たちの願いについて、神はずっと深い理解をもっておられ、私たちが願う前から私たちの求めを神は知っておられる。」

「イエスも私たちが他の人々のために祈ることを望んでおられます。そうすることで私たちは豊かにされます。」

「特定の人々や状況を祈りの課題として熱心に祈る人、その無私の心は大きな力となります。」

こうなりたい
明け渡し



こうしたい
祈るべきこと、祈ってはならないことについて考えよう。

きよめ 聖潔

◆ 聖潔への召し：聖潔が私たちの人間性を回復し、神と、他の人々と、この世界との私たちの関係を回復することを覚えて、生活のあらゆる面でキリストに似た者として生きることが大切です。救世軍人は聖書の教えが正しいものであることを日々の生活で表していくのです。

自分はキリストに似た者であると言う人々は、^{もうそう}妄想だ、心得違いをしている、などと追いつめられることがあるかもしれません。自分の^{けんそん}謙遜さをひけらかしていると言われたり、少しずれていると言われることもあります。幸いなことに、キリストに似た人だと思われる人は、人々の注目を自分に引き寄せることはしません。そういう人たちは、自分が他の人に霊的な感化を与えているなどとは思わないのです。

私たちがイエス・キリストに似た者になりたいと願うことは大切です。イエスとその生涯は、その教えを明らかに示しています。イエスの教えの価値は、イエスの働きの中に示されます。私たちが自分の価値をさらに深く知るように、とイエスはご自分を捨てられたのです。イエスは苦難と死をその身に受け、私たちがイエスにとって言葉で表せないほど大切なのだということを示されました。イエスに似た者になるというのは、目指すべき目標であるばかりか、私たちが生涯、求めていくべきことなのです。

イエスがご自分の教えのとおりになされたということが、私たちを支え、私たちにその意味を理解させてくれます。福音書を見ると、イエスが率先して動かれたこと（ヨハネ4章）、求めに応えられたこと（マタイ8:5～13）、質問（マルコ10:17）、批判（マルコ11:27～33）にも応えておられたのがわかります。私たちがキリストに似た者になりたいと願うとき、これらの出来事が、「イエスならどうなさるだろうか」という質問に答えてくれることでしょう。私たちの状況にぴったりと合うものではないかもしれませんが、イエスの生き方を通して、イエスが何を優先しておられたか、どんな基本方針をもっておられたかを知ることができます。

イエスが最初に弟子たちを召し出された後、多くの人々がイエスに従って行く



経験について感謝^{あかし}の証言をしています。最初の弟子たちへのイエスの招きの言葉は、「わたしについて来なさい」でした。それは教理とか規約とか（それらは役に立つものではありませんが）を守りなさい、というものではありませんでした。その召しは個人的なものであり、一人の人からもう一人の人へのもので、「わたしについて来なさい、というものでした。聖なる神が人の形をとられたイエスが、ついて来るように（マタイ4:18～20）、そして、イエスご自身に似た者となるように（マタイ11:28、29）、と私たちを招いてくださるのです。

その時以来、何世紀にもわたって、どのようにしたら聖^{きよ}い生活が送れるかについて教えられてきました。ある教えは、聖潔の教理がそれを教え、強めてくれるとしました。他の教えは、複雑であったり、詳しすぎたり、時には混乱させるようなものであり、矛盾^{むじげん}するものでした。イエスとの関係をすべてのことの中心に置くのが、最善の教えです^{*1}。そうすればすべてが明白になり、理解できるようになり、実際に即したものとなります。このことは救世軍の歌の中にもはっきりと示されています^{*2}。聖い生活とは、イエスについて行き、学び、従い、聖くされ、導かれることを続けていくことです。聖い生活は神学用語や、罪のない完璧な状態などに頼るものではありません。それはすべて、関係性、つながりなのです。ペドル大將が言われるように、「聖潔^{きよめ}が私たちの人間性を回復し、神と、他の人々と、この世界との関係を回復する」のです。

これはイエスの模範に従っていくことだけを指しているわけではありません。それを言うのは易しいですが、実行するのは難しいからです。もちろんイエスはそのことをご存じです。そこでイエスは、弟子たちを助け、「一緒にいる」ために、聖霊を送ると約束されました（ヨハネ14:16）。神の霊を私たちの内に迎え入れると、聖霊がいつも私たちと共にいてくださるのです。この関係には相互作用があり、生き生きとして、力づけられるものです。私たちの生活の中に聖霊がいてくださることに気づくと、私たちは歩みを進める中で、学ぶことができます。聖霊は導き、確信を与え、間違いを正し、励まし、促し、勇気づけ、力を与えてくださいます。

しかし、神は私たちに無理強いしたり、自動的に聖い生活ができるようにはし

てくださいません。私たちがイエスに従おうと願い、その願いがかなうことを望むなら、イエスの導きにいつも従っていくことが必要です。

私たちには神の助けが必要です。神がご存じのとおり、私たちには、誰でも、人生の心配事があります。自分自身や他の人々の気にかかること、潰^{つぶ}されてしまいそうになるプレッシャー、解決していない責任問題、私たちがどうにもならないと思ったり腹を立てたりする、不正。時には、物事をもっとうまく処理できたはずなのに、と考えます。力不足だ、と思います。キリストに似た者とはとても言えないと思います。後悔したり、失敗したりします。しかし、そういう中でも、神は私たちを理解し、支えてくださるのです。私たちが神の方に向き直る時、自覚しないかもしれませんが、私たちが従い、仕える、ただ一人のお方、イエス・キリストの思いを映し出す者とされていくのです。

イエスを知ること、毎日イエスとの関係を大切にし、その関係を育てていくことは、イエスの名においてその働きを推し進めるための最も効果的な方法です。聖リチャードの祈りにあるように、イエスをもっとはっきりと知るようになると、私たちの導き手に似た者となるという、弟子としての目標に一步近づくことになります。

考えよう

「イエスに似た者になるというのは、目指すべき目標であるばかりか、私たちが生涯、求めていくべきことなのです。」

「幸いなことに、キリストに似た人だと思われる人は、人々の注目を自分に引き寄せることはしません。」

「聖い生活とは、イエスについて行き、学び、従い、聖くされ、導かれることを続けていくことです。」

「神は私たちに無理強いしたり、自動的に聖い生活ができるようにはしてくださいません。」

こうなりたい
イエスに似た者に



こうしたい
自分の生活の中に聖霊を招き
入れているか確かめよう。

戦う備え

◆ 今、戦う備えをしなさいとの召し：「今」という言葉の緊急性を理解しなければなりません。私たちの世界は、今日、キリストを必要としています。私たちが自分のプランを実現してから後で、ではないのです。現在、私たちの働きの中で成さなければならないことはたくさんありますが、私たちが成長し、決意を固め、更なる戦いに備える間にも、戦いは続けなければならないのです。

私たちはインスタントの世代に生きています。私たちは成功するために、「今」自分が欲しいものを手に入れるために、「近道」をすることを覚えました。以前は、何世紀にもわたってそうでしたが、待つ必要がありました。もう待たなくてもいいのです。忍耐する必要がなくなりました。特に、電子メディアでキーボードを叩けば、データを見ることができるようになったのです。

しかし、人々を信仰に導く点については、常に緊急性があります。人はいつまで生きられるかわからないのだからということではなく、誰にも神の愛を知る日を逃してほしくないからです。ヘブライ人への手紙の著者が言うように、「今」が救いの日なのです。毎日です。

そうではあっても、他の人々がイエスを知る喜びを発見するための手助けをしようとする伝道者の中には、メッセージの緊急性を語るには、永遠につながる結果に対する恐怖を用いるのが最善だと考える人がいます。その結果として、神が私たちを愛しているというメッセージを混乱させ、私たちが従わないなら、永遠の責め苦に遭うと思わせるのです。これはイエスが伝えたメッセージではなく、イエスの教えとは違います。イエスが厳しい言葉を話されたとしたら、それは独りよがりの宗教指導者に対してでした。イエスは「娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう」(マタイ 21:31) と言われましたが、それは、「チャンスを得られなかった」*¹ 人々への理解を示されたのであり、独りよがりの人々がイエスに何を言おうと、気には留めないことを示すためでした。裁きは神に委ねるべきなのです。

人間の困窮については、私たちは自分の目で見える以上のものを、現代の様々



な情報を通して見るすることができます。何百万もの難民が家と呼ぶべきものを持ちません。自分の居るところがないのです。だれかが、どこかで、その人々の声を聞き、助け、迎え入れなければならないのです。人種差別はいまだに人間性の汚点です。文化的な水準を上げるための決断が急がれます。女性や子どもたちに対する差別が世界中で広まっており、ひどく、残酷な抑圧に歯止めをかけなければならないのに、それができていません。こういうことが正されずにいると、何百万もの人々の命が危機にさらされ続けるのです。

家庭内で、職場で、政府機関の中でも、正しいことが行われていないのに、それが表に出されていません。暴力、欺瞞、不貞の犠牲者たちは安心と癒しを求めています。気候変動、ホームレス、不寛容、飢餓、貧困、弁護してくれる人がいないことなど、これらは緊急の課題ですが、何も手をつけずにそのままになってしまうのです。

このような問題を抱えた世界の中で、救世軍は無条件で、緊急性をもって、関わろうとしています。救世軍がすべての問題を解決することはできません。心を込めて働く人々は、役に立っていないのではないかとか、資源が足りないとか思い、人間というものに絶望してしまうこともあります。窮乏は差し迫っています。絶えず緊張し続けることは不可能ですが、自己満足に陥ったり、熱心さを失ったりしないことが肝要です。

イエスからの召しは私たちをこれに似た場面へと導いて行きます。若くて、力を受けた、利己心のない働き人が必要です。しかも、緊急にです。年を重ね、献身の思いをもった人々の経験と理解は、大変貴重なものです。助けてほしいとの声はどこででも聞かれます。それに応えるのは今です。

ふつう、「戦う備えをしなさい」というテーマのなかでアシジの聖フランシスコを引き合いに出すことはないかもしれませんが、彼はこう言っています。「どこへ行っても福音を宣べ伝えよ。そして、もし必要なら、言葉を用いよ。」よく引用される彼の言葉ですが、それは福音の力を証するものとして、行動による模範と、言葉による模範を用いるようにということでした^{※2}。

新型コロナウイルス感染症の流行はパニックを起こし、切迫感を引き起こしました。突然、命を奪われる危険を突きつけられ、早急に被害を最小限にとどめる工夫をし、ワクチンを見つけることに奔走しました。この出来事は、壊れやすい世界に住む私たちに、信仰というものに心を開く機会となりました。クリスチャンたちは信仰とはどういうものかを、他の人々と分かち合う機会を得たのです。

緊急性というのはパニックとは違います。イエスはその働きをされる中で、急がされたり、狼狽させられることを拒否なさったことがありました^{※3}。地上での時間は限られていたのですが、イエスの教えや行動には、いつも、時間にとられない感覚がありました。イエスは永遠に目を向けておられました。私たちもそのようにしたいと思います。

私たちが使命を果たすときに、何ものも永遠なる神を驚かすことはない、ということ覚えて、安らぎを得たいと思います。「御心を痛める」ような出来事があるかもしれませんが、私たちはいつも神の守りの中にいるのです。神は過去にいまし、未来にいまし、「今」もいてくださり、パニックに陥ることは決してないのです。私たちが神の働きと御心に自分自身を献げるなら、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に」(ヘブライ 13:8) 揺るがない土台を与えてくださいます。毎日、日々にです。

考えよう

「それは、『チャンスを得られなかった』人々への理解を示されたのであり、独りよがりの人々がイエスに何を言おうと、気には留めないことを示すためでした。」

「こういうことが正されずにいると、何百万もの人々の命が危機にさらされ続けるのです。」

「心を込めて働く人々は、役に立っていないのではないかとか、資源が足りないとか思い、人間というものに絶望してしまうこともあるのです。」

「私たちが使命を果たすときに、何ものも永遠なる神を驚かすことはない、ということ覚えて、安らぎを得たいと思います。」

こうなりたい
備えをする



こうしたい
神を驚かせることは何もない
ことを知って、力を得て生きる。

第3章 さらに 愛する

関わりをもち、取り組もう

「神を愛し、隣人を愛すること以上に重要なことはない、とイエスは言われました。他の人々を実際に愛することをしないで、神を愛することはできません。私たちは人々に仕えることによって、御心^{みこころ}を行うのです。」

奉仕

◆ **奉仕への召し**：私たちが使命の中で最優先すべきことは、他の人々に仕えることです。士官、下士官、兵士、同友者、ジュニア・ソルジャーなどを大切に思うとともに、救世軍で働いている多くの人々やボランティアが、救世軍の働きにとって鍵となる人々であることを忘れてはなりません。

イエスに従っていく者にとって、神と人に仕えるということは、やってもやらなくてもどちらでもいいというものではありません。純粋な奉仕はクリスチャンの本物であるしるしです。それはイエスの思いを表しています。イエスは弟子たちに、「わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」(ルカ 22:27)と言われました。全能の神、主である方が、僕となることに何の矛盾も感じておられなかったのです。イエスは自分が来たのは仕えられるためではなく、仕えるためだ(マタイ 20:28)と、はっきりと言われました。イエスはこのことを繰り返し言われました。弟子たちにはそれを理解するのは困難でした。弟子たちだけではありません。今日も多くの人が同じ困難を感じています。

責任をもつ人が命令をし、部下はそれに従う、というのが普通の考え方です。イエスはそのことに反対はされなかったのですが、さらにつけ加えたいことがありました。イエスは弟子たちの汚い足を洗って、仕えるということを教えられた後で、互いに仕えるということを教えられました。「あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」(ヨハネ 13:13～15)これに続いてイエスは、仕える時にも権威をもってなすべきだと教えられました。「『わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。』」(34、35節)イエスが仕える時、その権威は低められることなく、高められたのです。これは弟子たちの場合でも同じです。

いつでも仕える用意があること、仕える者であることを受け入れ、他の人々の必要を自分の必要より先に置くことは、弱さではありません^{*1}。どのように従

うべきか、どのように仕えるべきかを知らないことが弱さです。「従うこと」と「仕えること」は合わせて行われるものであり、これらは従順であることとともに、他の人に仕える時、特に神に仕える時に、絶対に必要なものです。

イエスは自分の教えを身をもって証明されました。イエスは私たちの誰にもない力をおもちでしたが、父の御心に従順に従って奉仕することが、自分の働きに大切であるとわかっておられました。しかし、イエスが数年の間だけ仕える人であったと誤解してはなりません。私たちに仕えること、私たちのために「そこに」いてくださること、赦しと恵みが必要で、求められる時に、応えてくださる、それがイエスであり、イエスの思いなのです。

奉仕にはいろいろな形があります。救世軍は最初から奉仕をしてきました。救世軍は他の人々に仕えるために存在するのであり、自分たちの目的達成のために存在するものではありません。ウィリアム・ブースとカサリン・ブースはそう考えていましたし、救世軍の初期の歌には、仕えること、奉仕、仕える人などが、数え切れないほど入っています^{*2}。「仕えるために救われた」(saved to serve)のスローガンを表す2つのSは、制服に付けられています、いかにも明瞭です。それは意味するところをはっきりと宣言しているのです。救世軍人がどのようなものであるかを明瞭に示しているのです。

ですから、奉仕が救世軍の証明であることに驚くことはありません。様々な実地的な方法で表されます。不利な立場にいる人、貧しい人、虐げられている人、家や食べ物のない人、資格や身分のない人、愛のない人、望みのない人などの求めに応えようとするのです。特定の責任や活動に携わることによって、奉仕することもできます。例えば、音楽の面で活動する人々は、それが神への献身であり、奉仕であると考えます。同友者、救世軍で働く人、ボランティアなども、共に働きを担います。

しかし、奉仕は私たちが何をするかだけでなく、その奉仕がどのようになされるかが大切です。奉仕が無愛想な、上から目線で行われるなら、その良い働きが台無しになります。初めは関係を築くことが難しそうに思えても、真心を

込めて心くばりをする時に、その奉仕は大いに祝福されるのです。

奉仕の中心には指導力が必要です^{※3}。ペトロは当時の霊的な指導者たちに向かって、委ねられている人々に対して「権威を振り回し」てはいけないと勧めています(ペトロ5:3)。仕える人は真心から仕えるべきであって、自分の立場を高めたり、重要視させるために奉仕を用いてはならないのです。助けてあげたのだから、恩義を感じろなどと思ってはなりません。自分が認められたいからとか、何かお返しを求めるとかで、他の人に仕えるのは、本当の奉仕ではありません。それは^{まとはず}的外れなことです。それと同じように、他の人を豊かにするために働くことができたという喜びは、そうすることが正しいから生まれるのです。

イエスは、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(マタイ10:8)と言われました。イエスは本気でそう言われたのです。また、イエスは神と隣人を愛すること以上に大切なことはない、と言われました。私たちが他の人々を愛することをしないで、神を愛することはできないのです。私たちは人に仕える時に、神の御心を行っていることになるのです。

考えよう

「イエスに従って行く者にとって、神と人に仕えるということは、やってもやらなくてもどちらでもいいというものではありません。純粋な奉仕はクリスチャンの本物であるしるしです。」

「しかし、イエスが数年の間だけ仕える人であったと誤解してはなりません。私たちに仕えること、私たちのために『そこに』いてくださること、赦しと恵みが必要で、求められる時に、応えてくださること、それがイエスであり、イエスの思いなのです。」

「『仕えるために救われた』(saved to serve)のスローガンを表す2つのSは、制服に付けられています、いかにも明瞭です。それは意味するところをはっきりと宣言しているのです。」

「しかし、奉仕は私たちが何をするかだけでなく、その奉仕がどのようになされるかが大切です。」

こうなりたい
仕えるために救われた



こうしたい
人々に仕える時に、イエスを
模範とする。

礼拝

◆ **礼拝への召し**：私たちは礼拝を通して、神の贖いの愛に感謝を献げます。また、もっと多くの人々に手を差し伸べ、歓迎し、共に賛美と感謝を献げるために、その土地の文化にふさわしい方法を用います。

私たちは自分の生き方を通して、神を礼拝します※¹。最初からこのことを理解しておくことが大切です（ローマ12：1、2）。私たちの毎日の生活が、私たちの約束や祈りと合致していなければ、どんな公の礼拝、形式的な礼拝にも意味はありません。それはまた、私たちが公の集いに参加できなくなったとしても、真の礼拝がなくなってしまうものではない、ということです。

2020年に新型コロナウイルス感染症が世界中を震撼させました。ワクチンの欠如、コロナの蔓延と、私たちの健康への被害は恐ろしいものであり、世界中でいろいろな規制やロックダウンが起きました。教会での公の集いが禁じられ、どこへでも広がる危険なウイルスが人々の心にも入り込むのです。

公の礼拝をもつ権利を主張することは、無責任で、自己中心で、軽率だという人々が現れました。コロナが世界中を覆っている時に、ソーシャルメディアも含めて、礼拝のいろいろな方法が出てきました※²。すべてのことの根底にあったのは、礼拝や祈りが、開かれた教会の建物の中だけにあるのではないということへの新たな理解でした。教会は煉瓦とモルタルだけではない、それ以上のものなのです。教会は霊のものであり、どこかに押し込んでおくことはできないのです。サマリアの女にイエスが語られた言葉が、私たちの心に響きます。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」（ヨハネ4：24）

公の礼拝にはいろいろな形があります。私たちが神を賛美し、神に近づくために助けとなるものや、どうしても必要だと思うものは、様々です。救世軍人たちがこれが大事だと思うものは、単純なことです。偽りのない心と、神に心を開くことです。

普通、公の礼拝の中身は、祈り、歌、聖書朗読、音楽、説教、神の恵みと

神の働きに関する証言、儀式、他には救世軍のメンバーになる、何か誓約をする、などの特別なことなどです。救世軍人たちは公の礼拝を「集会」と呼びます。なぜなら、交わりと友情が欠かせないものだからです。神と出会う、お互いに出会うことが、救世軍人の礼拝の根本にあるのです。

礼拝は一方通行のように思われることがあります。人々が集い、神を見上げ、すべてを知っておられる神を尊敬の念をもって認める。しかし、実はそれ以上のものです。特に救世軍人にとってはそうなのです。礼拝では「自分のことは忘れて、神に集中すべきだ」という人がいます。それは救世軍での礼拝、「集会」が、どういうものかを正しく伝えていません。神との関係は相互作用であって、礼拝する者たちは神に自分を見ていただき、導きをいただくのです。カサリン・ベアードは「神の霊よ」という歌の中で、礼拝で求めるべきものが何かを示しています。第4節にこうあります。「主なる神よ、私は御許にまいます、あなたの命は私のうちに息づいています。私のすべてを御手におゆだねします」。神との交わりは双方向のものです。私たちは神の前に自分を顧み、導きを受けるのです。

いくつかの教会で、限られた人数の公の礼拝が再び許されるようになると、今まで禁じられていた歌を歌うことの価値が吟味されることになります。私たちはなぜ歌うのか。今までみんなでやってきたことだから？ 神に対する同じ祈りと同じ言葉を献げられるから？ 献身と感謝の思いを一緒に表すことができるから？ 他の人々と共に神の国の一員であり、この時にそれを共有できるから？ どれも当たっています。

しかし、私たちは一人ひとり異なっていますから、神に近づくにはこうしたほうがいいと思うことがあります。私たちが好まない表現を取り入れたいという人もいるでしょう。こうしたことは現実には起こることであり、お互いに噛み合わないと思うこともあります。でも、それは厄介なことを引き起こそうとしているわけではないのです。そういう時に必要なのは、よく耳を傾けること、理解しようと努めること、他の人々の霊的な必要を受け止めること、みんなで一緒に進めようとするということです。豊かな恵みが必要です。自分が、自分がという思いは、

その反対のことしかできません。

決して忘れてはならないことは、新来者や落ち着かない気持ちで出席している人が、「自分の家にいるような」気持ちになれるよう手助けすることです。初めて来た人が、自分の生活と救世軍人の生活には大きな隔たりがあると感じれば、一回限りの出席となります。宗教的な言葉、「身内」の言葉を多く使うと、新来者は疎外された気持ちになります。他の人々への配慮が自然にできるようになるまでは、いろいろなことを配慮して、新しく来た方たちの靴に自分を合わせていくことが必要です。

最後に、クリスチャンの交わりに入りたいと思う人、そこから逃げ出したいと思う人、どちらにしてもその理由の多くは教理ではなく、交わりなのです。心からの歓迎を表しましょう。私たちの真の礼拝は、私たちの行動に表れます。

考えよう

「私たちの毎日の生活が、私たちの約束や祈りと合致していなければ、どんな公の礼拝、形式的な礼拝にも意味はありません。」

「救世軍人たちがこれが大事だと思うものは、単純なことです。偽りのない心と、神に心を開くことです。」

「神との交わりは双方向のものです。私たちは神の前に、自分を顧み、導きを受けるのです。」

「しかし、私たちは一人ひとり異なっていますから、神に近づくにはこうしたほうがいいと思うことがあります。私たちが好まない表現を取り入れたいという人もいます。」

こうなりたい
真心込める



こうしたい
自分の生活の中で神を礼拝する。

確信

◆ **福音を確信することへの召し**：福音の良いニュースを分かち合うとき、福音には人を救い、人を造りかえる力があることを認めなければなりません。人々は神から与えられている可能性に到達することを妨げるすべてのものから、聖霊の力によって自由にされるのです。

福音への確信は、福音があなたのうちに働くことを知ることによって与えられます。ある人たちにとって、それは今までのシナリオから、神の力によって「新しい」人となる、変えられた人になることです。変化は劇的で、福音の力のはっきりとした証拠となるでしょう。他の人々にとっては、福音は幼い時からずっと知っていることであって、神の臨在とその愛をいつも受け止めているということです。長年にわたって築かれてきた信頼もまた、イエスがいつもその御言葉に忠実である証拠です。

信仰に関しては、個人的な経験には力があります。しかし、イエスの教えをよく調べ、吟味し、それを実行することは、他とは比べものにならないほど、素晴らしいことなのです。イエスが強めてくださるのです。イエスの言葉と行動は、一致しています。補い合っています。イエスご自身の中に見られる生活の基準以上のものはないからです。イエスは人々に自信を与え、良くなる可能性、より良い生活を送る可能性を示してくださるのです。

イエスが、嫌われ者の徴税人ザアカイに、その家に泊まりたいとおっしゃった時、木に登っていたザアカイは「急いで降りて来」た、とルカは記録しています（ルカ 19:6）。そうすることによって、自分がもっと良い人になれる、尊厳を取り戻し、新しい人、純粋な人になることができるという確信を与えてくれる人を、ザアカイが待っていたことがわかります。イエスは自分に注意を引きつけるために、他の人をけなすようなことはなさいません。イエスは人々が立ち上がれるように助けてくださるのです。イエスは人々を信じておられるので、人々が自分に自信をもつようにと助けてくださるのです。イエスはご自身の福音の中で、私たちに確信を与えてくださっています。私たちも同じようにするようにと召されているのです。



福音は完全であり、すべてを包み込むものなので、それを飾り立てる必要はありません。神がなさったこと、これからなさろうとすること、約束されたことなどを大げさに言う必要はありません。時に、人々を信仰に導く助けをしたいと熱心になるあまり、神の（非現実的にも思えるような）約束に真っ向から対抗するような人生の現実があることを忘れてしまいがちです。現実を認めないという過ちは、結果として、福音への確信を損ないます。そのようなことは避けなければなりませんし、また、無理に感情に働きかけることも避けなければなりません。

重要なのは、福音の力が逆境の中ではっきりと表されることです。イエスが私たちのために苦しむことを選ばれたこと、今日も私たちと共に苦しんでいてくださることを知る時、神が遠くに離れていて、何も感じない方ではないと、気づくのです^{*1}。イエスは私たちと同じ人となり、問題や困難の中にいる私たちと共に歩き、力を与え、希望を与えてくださいます。イエスの福音は、長生きや、困難の全くない人生を約束してはいません（ヨハネ 16：33）。イエスが約束されたのは、永遠の命（ヨハネ 3：16）です。それは今ここで始まるもので、私たちがどのような境遇にいても、共にいてくださり、力づけてくださるのです。イエスが共にいてくださらないような状況は一つ也没有ありません。

ここで福音の核心に触れることにしましょう。つまり、神の愛です。福音とは「良いニュース」のことです。歓迎し、喜んで受け取るものです。神の愛がどんなに遠くまで届き、すべてのものを包み込むかを説明するのは難しい、とクリスチャンは思います。パウロは初代のクリスチャンたちが、キリストの愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」を理解するようにと祈っています（エフェソ 3：18）。よく使われる「驚くべき」、「はるかに超える」などの言葉から、現代のクリスチャンたちが、愛の深さを伝え、ふさわしく表現する言葉を見つけるのに苦労していることがわかります。しかし、神が私たちと正しい関係を結ぼうとしておられるということは事実です。私たちがそのことを表すにふさわしい言葉を見つけることができないとしても、です。

イエス—人間の形をとられた神—が天から地上に来られました。それは私た

ちに会うため、私たちの間に住むため、私たちを愛するためでした。イエスは虐待され、誤り伝えられ、間違って受け取られ、あざけられ、馬鹿にされ、苦しめられ、最も身近な弟子たちに捨てられ、人間が経験する究極の責め苦、神に見捨てられる思いをされました（マタイ 27：46）。それでもイエスは思いとどまることをなさいませんでした。私たちへのイエスの愛は、完全なものであり、ご自分を与え尽くすものでした。イエスは私たちが応えることを強要せず、私たちがイエスにとってどれほど大切であることを示すために、すべてのことをご自分の力でなさったのです。それなのに私たちは、神が人間のあら探しでもしているかのように、福音に覆いをかけた仕方で語ってしまうことがあります。それによって、神の被造物である私たちが神にとってどれほど大切かという、その驚きと不思議さを、水で割ったように薄めてしまうのです。

私たちが福音を確信したいと思うなら、イエスが私たちをどれほど大切に思っていてくださるかを考えるとよいでしょう。初期の救世軍人たちは強い確信をもっていました。それは彼らの音楽、行軍、証言、喜びの中にはっきりと表されています。ヘブライ人たちは「自分の確信を捨ててはいけません」（10：35）と励まされています。私たちがその確信を取り戻すべき時です。

考えよう

「イエスは人々に自信を与え、良くなる可能性、より良い生活を送る可能性を示してくださるのです。」

「それを飾り立てる必要はありません。神がなさったこと、これからなさろうとすること、約束されたことなどを大げさに言う必要はありません。」

「私たちは、神が人間のあら探しでもしているかのように、福音に覆いをかけた仕方です。それによって、神の被造物である私たちが神にとってどれほど大切かという、その驚きと不思議さを、水で割ったように薄めてしまうのです。」

「初期の救世軍人たちは強い確信をもっていました。それは彼らの音楽、行軍、証言、喜びの中にはっきりと表されています。」

こうなりたい
確信する



こうしたい

イエスが一人ひとりの人生を変えることがおできになるという確信を、他の人々にもってもらおう。

第4章 もっと間近く つき従う

任務を果たそう

「私たちがもっと間近くイエスにつき従うなら、周辺に追いやられた人々、排除されている人々、見過ごされている人々に対して、私たちはもっとイエスの使命を実行していくことができるのです。カインは『わたしは弟の番人でしょうか?』と神に尋ねています。それに対する答えは、『そのとおりだ』です。」

すべての世代の人々を養い、育むこと

◆ **全ての世代の人々を養い、育むことへの召し**：私たちは子どもたち、青年たち、若い指導者たちに対して責任をもたなければなりません。現在と将来の救世軍のために、彼らを備えさせ、育て、力づけ、訓練することが大切です。

人の寿命が伸びてきており、以前にも増して、多くの世代が共に生活するようになっています^{*1}。寿命は伸びてきましたが、あらゆる場面での変化の速度は増し、そのスピードに追いついていくのが難しくなっています^{*2}。どの世代もその影響を受けています。

世代間の挑戦は、今までにもありましたが、今では、他の人々の恐怖や欲求不満をどのように扱い、理解していくかという新しい挑戦が加わってきているのです。今日、新型コロナウイルス感染症の蔓延^{まんえん}で物事はますます複雑になり、挑戦も今まで以上に困難なものになっています。時には、若者たちの未来が見えにくくなってしまったり、他の人たちと繋がりをもつとか、人生の伴侶を選ぶことなども、限られた範囲内で行われるということになります。健康面で最も危険な状態にあるとされる高齢世代は、責任をもって行動し、ウイルスを寄せつけないようにと、若者の知恵と洞察力に頼っています。役割分担が逆になっているように見えます。中年層の人々は、あらゆる面で責任を負っています^{*3}——子どもたち、高齢の親たち、自分の職業、あらゆる世代に影響を与える最も深刻な経済問題をどのように切り抜けていくか、等々。

しかし、すべての世代がそれぞれ何かを提供することができます。一人ひとりが他の人のために何かすることができるのです。分かち合い、支え合うときに、挑戦すべき事柄に立ち向かうことができます。

教会は近年、世代間の挑戦を経験してきました。若い人たちは、リーダーシップを取るという点で、除外され、十分に用いられていないと感じてきました。自分たちはできるのだから、受け入れてくれと要求します。しかし、自分たちの至らなさに気づかず、また、自分たちの求めていること、要求していることを理解しようとしている人々を受け止めようとしません。それとは反対

に、高齢者たちは限界に近いところまで追いやられていると感じています。高齢者たちは、すべての人を包み込んで発展していこうという働きがなくなり、「変化」を持ち出す人々によって、いつもの交わりから追い出されたと感じています。しかし、すべての人が他の人のために働き、それぞれの賜物^{たまもの}を有効に用いる場があるはずです。寛大さ、クリスチャンの徳である忍耐、柔和、親切、愛は不思議を行うことができるのです。

救世軍が挑戦を受けずにきたわけではありません。ある場所では、状況に対する創造的な思考を取り入れてきました。しかし、いつでも挑戦に対して立ち向かってきたわけではありません。そうこうしているうちに、機会を逃し、若い人たちや高齢の人たちとの交わりのチャンスを捉え損なってしまったのです。

長年にわたって、ジュニア・ソルジャー^{*4}をはじめ救世軍の働きに寄与してきた数々の道筋は、救世軍の土台を支える重要なものでした。どれも私たちに、繋がっている、一緒だ、という気持ちをもたせてくれました。最近では、土台を築き上げることにあまり関心を寄せなくなったために、ジュニア・ソルジャーや大人部の兵士になる人が少なくなり、その結果として士官になる人も少なくなりました。

それとともに、伝道を優先し、それを強調し、キャンペーンを進めてきたのは良いことでしたが、不幸なことに、「現状を維持するための働き」と呼ばれるものが、見落とされ、すでに救世軍に属している人々を育て、その信仰を高めていくことをあまり重要視しなくなってきました。救世軍の使命や働きをバランスよく進めるには、教育や牧会に時間やエネルギーを注ぐことが大切です。働き人たちがいて当然と考えてはならないのです。救世軍の優先事項として、3つのことがあげられています。「霊魂を救い、聖徒を育て、苦しむ人々に仕える」、これらの一つひとつが大切です。「聖徒を育てる」ことを見落とすと、土台は揺らいでしまいます。

ある文化では、高齢の人々をその他の人々より大切にしますが、多くの文化においては、高齢で経験豊かな人々を周辺に追いやってしまい、彼らに機会を

与えないばかりか、彼らを支え、お互いに豊かにされる関係を奪ってしまっています。高齢の世代の人々は、若い人々が霊的にも、社会的にも成長するために、時間を献げる機会をもっています。そういう機会に気づかずに過ごしてはいないでしょうか。機会を捉えてほしいという声が聞こえるようです。

救世軍ではその初期の時代から、集会に参加することを大切にしてきました。それによって、若い人々も確信をもち、指導的な立場も与えられ、自分も役に立つのだという思いをもつことができました。こういうことを見過ごしにしてはなりません。自分もこのグループの一員なのだと感じ、自分の役割を意識することができたのです。「周辺に追いやられた」人々、または、新しい人々が、自分たちも大切にしてもらっていると感じるようにすることも大切です。しかし、そのような機会に気づき、手を差し伸べる人が不足している時があります。

救世軍には、すべての人のための場所があります。救世軍人が神から託された責任、人々が神の国に喜んで迎え入れられる手助けをすること、これを覚えていさえすれば、救世軍の名に恥じない生き方ができます。若い人にとっても、高齢の人にとっても、コロナ禍は新しく、複雑な挑戦を突きつけました。今までになかった新しい必要や機会が生まれてきています。それに気づいて、それを解決するために、また、私たちの使命をますます効果的に推し進めるために、新しい方法を見いだすことが必要です。

考えよう

「すべての世代がそれぞれ何かを提供することができます。一人ひとりが他の人のために何かすることができるのです。分かち合い、支え合うときに、挑戦すべき事柄に立ち向かうことができます。」

「若い人たちは、リーダーシップを取るという点で、除外され、十分に用いられていないと感じてきました。自分たちはできるのだから、受け入れてくれと要求します。」

「高齢の世代の人々は若い人々が霊的にも、社会的にも成長するために、時間を献げる機会をもっています。そういう機会に気づかずに過ごしてはいないでしょうか。機会を捉えてほしいという声が聞こえるようです。」

「『聖徒を育てる』ことを見落とすと、土台は揺らいでしまいます。」

こうなりたい
支える



こうしたい
あらゆる世代の人々が、お互いの益のために働くように励ます。

犠牲を伴う愛

◆ **犠牲を伴う愛への召し**：私たちは他の人々を守り、正義を求め、寛大に振る舞い、救い出す活動に参加しなければなりません。

私たちはイエス・キリストについて来るようにとの召しを受けた時、犠牲を伴う愛の業をはっきりと示してくださったその模範に従いたいと願いました。福音書にはイエスが憐れみを示されたことがたくさん書かれています。重い皮膚病の患者に触れて癒し、生命、視力、聴力、体を動かす力などを取り戻させ、健康な体をずいぶん昔に失ってしまった人々に希望を与えるなど^{※1}。

また、イエスは社会的に不利な立場に立たされている人々や、周辺に迫られている人々をいつも助けていました。イエスがそういう人々と深く関わりをもったのは、人々をケアするにはどうしたらよいかを示すためだけではなかったのです。イエスは神の心を表していました。自分の名誉や評判を気にすることなく、声なき人々を擁護し、無関心な人々を非難しました。神が犠牲を伴う愛の方であることを示されたのです。

「姦通の現場で捕らえられた」女（ヨハネ 8:2～11）や、イエスに対する感謝を途方もないやり方で表した「罪深い女」（ルカ 7:36～50）などを、イエスは弁護し、宗教指導者やその他の人々の、外見を飾り立てた、弱い人への無頓着な態度を即座に非難しました（マタイ 23:1～36）。そのことによってイエスは権力者たちの支持を失うこととなりました（マタイ 21:45、46）。しかし、イエスは「自堕落な」生活をしていたサマリアの女（ヨハネ 4:4～30）や、金持ちではあったが、人のものを盗んでいたザアカイ（ルカ 19:1～10）や、人々が叱りつけて黙らせようとした盲人のバルティマイ（マルコ 10:46～52）と関わり、愛の業をなしてくださいました。これらのことは、イエスが、最悪だと思われていた人々の中に善に対する可能性を見ておられたこと、ご自身の評判より、そういう人々のニーズを大切に思っておられたことを示しています。

これらのことは、21世紀の教会が覚えていなければならないことです。救世軍が生まれたのは、そのようなチャレンジを受け止めるためであり、人の賞賛を求めるためではありません。慈善事業を行う団体は、自分たちの働きが世

間でどう受け止められているかを気にします。犠牲を払って、深く入り込めば入り込むほど、支援を失う可能性があります。誤解や、故意に誤り伝えられることにより、事は複雑になりがちです。イエスはそのような事に出合わねばなりませんでした。私たちはイエスの導きに従い、その模範にならうのです。

イエスは弟子たちに、愛には犠牲が伴う、と教えられました。また、それを弟子という面から強調されました（ルカ 9:23～25、57～62）^{※2}。弟子たちはイエスの愛には犠牲が伴っていたことを目撃していました。それは毎日、徹底していました。十字架にかかる晩には、そのことがこの上なくはっきりと示されました。自分を殺そうとしていた人々のために、イエスは祈られたのです（ルカ 23:34）。弟子たちはそれを聞いていました。そのような愛を見習うことはできません。物事を見通す力、決意、決断力に私たちは驚愕するのみです。それと比較して、私たちは自分の至らなさを思い、イエスと繋がることから与えられる力をいただいて、犠牲を払う愛の人とならせていただきたいと願うのみです。救世軍人たちが助けると誓った人々は、「愛されていない人」で「愛らしくない、不快な人」である場合があります^{※3}。ニーズを抱えている人々は、「協力的でない」、「世をすねている」、「難癖をつける」、「不快感を起こさせる」かもしれません。それには理由があります。犠牲を払う愛の痛みなくしては、彼らのニーズは満たされず、彼らの生活は変わらないからなのです。

今日、世界には膨大なニーズがあり、犠牲を伴う愛が必要であることは、誰にでもわかります。しかし、最も困窮している人々に目を留める人がいないのです。異なる文化の中に住む人々は、貧しい人々を見下し、手助けできる人々なのに、なぜ自分たちが関わらねばならないのか、と思うのです。この上ない貧窮の中にいる人々のことを気にかけるとか、理解しようとするのがないのです。手軽な解決策や、迅速な手立てとして、支援の助けにと、名ばかりの物が配られることがあります。問題の核心に触れることは難しいのです。犠牲を伴う愛の代わりになるものはありません。骨を折ること、時間、エネルギー、犠牲が必要です。これらは最も実質的な形で、愛を込めて、配られることが必要なのです。それでも、時には、あまり感謝されません。

パウロはガラテヤの信徒たちに「善を行うことに、うみ疲れてはならない」(ガラテヤ6:9)と勧めています。愛の業に疲れてしまうことがあるからです。イエスは人々の世話をするのと、休息して気分を一新することのバランスを上手に保っていました(マルコ1:35)。私たちにもそのようにするようにと勧めてくださるのです(マタイ11:28~30)。人々を世話する時に、知らず知らずのうちに陥りやすい誘惑は、自分たちが支えようとする人々の益のためよりも、奉仕する側に都合よく、手順や運営を整えてしまうことです。そのようにしてつくられたシステムは、もう一つのハードルとなり、助けを必要としている人々をがっかりさせます。簡単でわかりやすいことを期待している人々に、問題を押しつけることになります。しかも、奉仕する人々は自分たちが事を複雑にしていることに気づかないでいるのです。

私たちが召されたのは、守ってくれる人をもたない人々を守り、正義を擁護し^{※4}、寛大な行為をなし、失われた人々を救うためです。私たちがイエスにもっと間近につき従うなら、周辺に追いやられた人々、締め出された人々、見過ごされた人々に対するイエスの使命を行っていくことになります。カインは「わたしは弟の番人でしょうか」と神に尋ねています(創世4:9)。「そのとおりだ」というのが確実な答えです。

考えよう

「私たちはイエス・キリストについてくるようにとの召しを受けた時、犠牲を伴う愛の業をはっきりと示してくださったその模範に従いたいと願いました。」

「ニーズを抱えている人々は、『協力的でない』『世をすねている』『難癖をつける』『不快感を起こさせる』かもしれません。それには理由があります。」

「手軽な解決策や、迅速な手立てとして、支援の助けにと名ばかりの物が配られることがあります。問題の核心に触れることは難しいのです。」

「私たちが召されたのは、守ってくれる人をもたない人々を守り、正義を擁護し、寛大な行為をなし、失われた人々を救うためです。私たちがイエスにもっと間近につき従うなら、周辺に追いやられた人々、締め出された人々、見過ごされた人々に対するイエスの使命を行っていくことになります。」

こうなりたい
与える



こうしたい
イエスがなさったように、また、イエスが命じられたように、愛を行動で示す。

すべてを包み込む

◆ **すべてを包み込むようにとの召し**：私たちは、キリストの名によって人々の必要に応える使命に、いかなる差別もあってはならないことを覚え、すべての人に尊敬の心と愛をもって対応し、その点で非難されることがあってはなりません。

「私たち」という考えが起こると、必然的に「彼ら」ということが起こります。それは避けられないことです。自動的にそうなります。本来の自分というものができ上がります。私たちは皆そういうものをもっています。救世軍は教会の内外で強烈な独自性をもっています。制服は目立ちますし、軍旗、行軍、パレード、世界中で行われていることがそうなのです。人に覚えてもらえる、奉仕に役立つ、これは戦略でもあるのです。そこまではそれで良いのです。

しかし、「私たち」と「彼ら」は、仕切りをつくり、障壁となり、「他の人々」に除外されたと感じさせてしまいます。そういうことは小隊の中でも起こります。音楽部門の人たちは、しっかりとした、健全な、仲間意識をもっているの、会衆の人々からは自分たちとは別で、何となく離れているように見られることがあります。そういうつもりはないのですが、他の人々から離れているように見えることはあるのです。他のグループやクラブでも、その正式メンバーになるという点で、同じ危険が起こります。この「彼ら」と「私たち」は、若者と高齢者、男性と女性、黒人と白人などについても言えることです。他にも区別があります。金持ちと貧乏な人、異性愛者と同性愛者、健康な人と病人。私たちはそういうことにあまり気づかないかもしれませんが、除外された、軽視された、理解されなかった、という気持ちは、そういう人々の心を傷つけているのです。

救世軍が起こった理由の根源には、周辺に追いやられた人々、見過ごされた人々、虐待された人々、搾取された人々、そういうことを誰にも話せなかった人々に対する熱情がありました。このような熱情と確信は救世軍の力となり、大勢の「思わぬ人々」が救世軍に加わりました。彼らは歓迎され、住む所を与えられました。救世軍にはそういう人々を受け入れる場があり、それが大切なことです。救世軍が立派になってしまっ、その存在の目的である人々を当惑

させるような誘惑は、断固として避けねばなりません。回心する人たちの中には、うまくいかずに、つまづいてしまう人もあることを覚えなければなりません。そういう場合に、私たちがどのように振る舞うかに注意しなければなりません。イエスがされたように、私たちも手助けをし、寄り添うことをすべきで、見捨てたり、非難してはならないのです。

教会の外にいて、中を覗き込んでいるような人々について考えてみましょう。そういう人々と私たちの間には大きな隔たりがあります。形式ばった礼拝とか、それとは逆に、元気に満ちた礼拝も、人々を遠ざけるかもしれません。礼拝で使われる言葉とか、クリスチャンの間ならわかる言葉などについても同じことが言えます。クリスチャンを見て、聖い人だなと思うと、近くに寄れないと感じさせてしまうかもしれません。日曜の朝、礼拝のために教会の建物や救世軍の会館に入るということ自体が、なんとなく心配な気持ちをもたせてしまうのです。その必要はないのですけれども。このような挑戦はいくつもあります。私たちがありのままにいてをやめるというものではありません。ただ、「他の人」のことを気づかい、私たちクリスチャンの仲間に入ってもらいたいと願うならば、人々にもっと近づき、人々のことをもっと理解しなければなりません。

長年にわたって救世軍がその特徴としてきたものの一つに、聖い生活を大切にすることがあります。それは数え切れないほど多くの人々を豊かにし、献身を促し、人々の人生を変え、状況を変えてきました。人々を「包み込む」というのは、同じ「水準」を受け入れて、それに従って生きていくことができないと考える人々や、事情や状況から「署名すること」ができないでいる人々に、自分たちは除外されたとか、ふさわしくないのだと感じさせないことです。本来、他の人々の益のために生まれた救世軍ですから、そのドアを閉めるのではなく、いつも開けておかねばならないのです。「……してはならない」ということを気にするあまり、すべての人を包み込むことを忘れる、このことがある最高会議で取り上げられ、ポール・レイダー大將は次のように述べました。「自己防衛と保守的なやり方を打ち破らないなら、いくつかの場所で、自分たちの威厳を保つということのために私たちは死んでしまうことになる。」^{*1}

キリストの名において、分け隔てなく、人々のニーズに応える、これが救世軍が大切にしていることです^{*2}。今日も、この自分を献げて仕える業が行われていますが、それは容易なことではありません。敵意、反対、誤解、誤って伝えること、援助が受けられなかった時のいやな経験、感謝の気持ちの欠如、様々な文化的な相違、高い目標に届こうとしていることに対する偏見など。状況がどのようなであっても、イエスが教え、示された、愛の掟が、何にも優^{おきて}って行き渡らなければならないのです。また、それが私たちの願いを決定するのです。

考えよう

『『私たち』という考えが起こると、必然的に『彼ら』ということが起こります。それは避けられないことです。自動的にそうなります。本来の自分というものができ上がります。私たちは皆そういうものをもっています。』

「救世軍が立派になってしまっ、その存在の目的である人々を当惑させるような誘惑は、断固として避けねばなりません。」

「人々を『包み込む』というのは、同じ『水準』を受け入れて、それに従って生きていくことができないと考える人々や、事情や状況から『署名すること』ができないでいる人々に、自分たちは除外されたとか、ふさわしくないのだと感じさせないことです。」

「状況がどのようなであっても、イエスが教え、示された、愛の掟が、何にも優^{おきて}って行き渡らなければならないのです。」

こうなりたい
すべてを包み込む



こうしたい
「彼らの」靴に自分を合わせる。

第5章 日々に

「従うということは、試しにやってみるというのとは違います。自分にぴったりの弟子像とはこういうものだ、こういう弟子像は避けよう、と考えることでもありません。ついて行くとはい、導かれていくことなのです。」

出発点

イエスに従っていくと決めた時、それがどういうことなのかをはっきりと知ることが大切です。まず手始めに、従うということは、試しにやってみるというのとは違います。自分にぴったりの弟子像とはこういうものだ、こういう弟子像は避けよう、と考えることでもありません^{*1}。ついて行くとはい、前述したように、導かれていくことなのです。

このことは私たちの祈りにも関わってきます。私たちが何を求めるのか、何を期待するのか、どれほど深く信頼しているのか、何を達成したいと思っているのか。私たちは神の御手の中にいます。その御手は安全です。親切です。どのように行く手を指し示すかを知っています。それは十字架に釘づけられた手であり、私たちがイエスにとってどんなに大切であるかを示しています。これ以上にすばらしい手はないのです。ですから、その御手に信頼しましょう。

もう一つは、すでに述べたことですが、神を驚かすもの、神の知らないことは何もないということです^{*2}。神はかつておられ、今おられ、将来もおられる方です。すべてをご存じです。私たちの過去もすべてご存じで、将来もすでにご存じです。私たちと共に「今」を過ごしておられます。ですから当然、神は決してパニックに陥ることはありません。私たちはしばしばショックを受け、当惑しますが、神はそうではありません。私たちは神を信頼することができます。どのようにしたらそのようにできるのか、学ぶ必要があります。神は私たちを助けてくださいます。

また、神が何を約束してくださるか、何を約束してくださらないか、を理解することも大切です。私たちが心のうちにお招きするなら、絶えずそこにいてくださる、生涯を通してそばにいてくださる、と神は約束してくださいます。マタイによる福音書(28:20)に「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とイエスが最後に語られた約束があります。導き(ヨハネ14:26)、心にかけ(ペトロ5:7)、私たちが知っておられ(詩編103:14)、私たちが失敗した時に赦し(詩編103:12)、永遠の命を約束してくださいます(マタイ19:29)。また、私たちが「命を……しかも豊かに受けるため」(ヨハネ10:10)に来たと約束しておられるのです。

しかし、イエスはクリスチャンを特別扱いして、困難のない(ヨハネ16:33)、苦しみや病気のない、死を避けて通れる生涯を約束されたわけではありません。ある伝道者たち(いささか誇張して話す人々)の言うことを聞くと、間違った期待を抱きそうになります。イエスのくださる癒しは、そのようなものではありません。それは永遠のものであり、その光の中でイエスの約束と行いを見ることができたら、それは助けになります。そういう意味で、私たちは失望することがないのです。私たちの足元には、喜びと確信と安全があるので、他の人々を間違った道に導くことはないのです。

召命に応じてイエスに従うことが、必ずしも家を離れることなのではありません。イエスと共に歩む道は、それぞれ異なっています。しかし、私たちはイエスが世界を見ておられることを忘れてはなりません。自分の必要、自分の共同体、自分の偏見を超えて、物事を見るようにと私たちは求められているのです。イエスの御腕は世界に向けて広げられています。私たちの腕もそうすべきです。愛は家庭から始まる、と言われますが、そこで終わってしまっただけではありません。私たちがイエスの使命をいただくとき、多様性に満ち、不十分で問題の多い人々のいる世界を丸ごと抱きとめるのです。イエスがなさったように世界の可能性を、はっきりと、愛を込めて見ることは、私たちにはできないかもしれませんが、イエスはそうやって見るように、と私たちに言われるのです。それを実践するときに、自分たちの思いをはるかに超えた豊かな恵みいただくのです。

神は私たちを大切に思っていてくださいます。神は一人ひとりをご自分にかたどって造られました。(私たちがどの宗教を選んだか、押しつけられたかにかかわらずです。)神は私たちが神の中に救いがあることを知ってほしいと願っておられます。神は赦し、回復させ、恵みを与え、支え、慰めてくださいます。私たちが私たちの主のようになりたいなら、これらのことを受け止めなければなりません。

イエスは塔を建てようとする人のことを話しています(ルカ14:28)。仕事を始める前に、その人は費用を計算します。自分の建たい物がどういうもので、その費用を支払う用意があると考えます。私たちがイエスについて行くと、こ

の人のしたことを思い出すべきです。まず腰をすえて、様々なことを思い巡らし、祈るのです。弟子になるとはどういうことか、自分の決意はどうか、と考えてください。それから、あとはすべてイエスにお任せするのです。

考えよう

「従うということは、試しにやってみるというのとは違います。自分にぴったりの弟子像とはこういうものだ、こういう弟子像は避けよう、と考えることでもありません。」

「私たちがイエスの使命をいただくとき、多様性に満ち、不十分で問題の多い人々のいる世界を丸ごと抱き止めるのです。」

「イエスがなさったように世界の可能性を、はっきりと、愛を込めて見ることは、私たちにはできないかもしれませんが、イエスはそうやって見るように、と私たちに言われるのです。それを実践するときに、自分たちの思いをはるかに超えた豊かな恵みをいただくのです。」

こうなりたい
イエスに導かれる



こうしたい
神があなたに約束して
くださると信じていることを
いくつか挙げてみよう。約束
していただかないと思うこと
も挙げてみよう。

距離

コロナ禍が生み出した人間の動きの一つに、「通りの向こう側を歩く」^{*1}があります。他の人からの感染を避け、自分も他の人に感染させないために、お互いの間に距離を置くようになりました。クリスチャンもそうするのです。これは常識となりました。また、以前にも増して、これから先がどうなるかわからないので、私たちは一日一日を生きることを大切に考えるようになりました。

教会やチャペルや救世軍の会館が閉じられて、神の家に集まり、共に語り、神に近づくことができないということが起こってきました。「神は私たちと共におられる」—遠く離れているのではない—ということが強調されました。そして、日曜日だけでなく、毎日が霊的に大切な日だと気づくようになりました。

もう一つ注目すべきことは、みんなが集まる日曜の礼拝に代わって、オンラインでの礼拝になったことから、今まで教会に行っていなかった人々がオンライン礼拝に参加するようになったのです。彼らはその礼拝参加を続けているのです。コロナ蔓延のために、彼らは神に心を向け、信仰について考えるようになりました。しかし、また別の要因もあります。多くの人々は「教会」から遠く離れていながら、神に近づくことを考えているのです。熱心すぎる伝道者たちに「困らせられる」ことを心配していた人々、教会のやり方に引き込まれそうになっていた人々、教会に「熱心になるように」と勧められていた人々が、そんなことを心配しなくてもよくなったのです。黙って聴いて、自分はどうすべきかを静かに考えることができるようになったのです。理由はどうであれ、以前には何の興味も示さなかった人々が、信仰というものを考えてみるようになったのです。

このことは使命と機会にどう繋がるのでしょうか。私たちはどう進んでいけばよいのでしょうか。どのようにしたらこのような人々をクリスチャンの交わりに招き入れることができるのでしょうか。現在、距離を保つことを望んでいる人々のニーズに、どのようにして応えることができるのでしょうか。こういう疑問を「かたい」箱の中に押し込んではいけません。クリスチャンはこれらの問題を探るために努めなければなりません。学ぶことがたくさんあります。私たちの奉仕と使命の中に取り込むべきものが多くあるのです。

しかしながら、神が求めておられることや、変えたいと思っておられることが何なのかを恐れて、神に遠く離れていてほしいと望むのが人間、と言えるかもしれません。イエスは放蕩息子^{ほうとうしこ}の譬え話^{たとえはなし}の中で、この息子が「遠い国に旅立ち」（ルカ 15：13）と言われました。そこは息子がどんなに荒れた生活をし、つらい思いをしたかを両親は知りえないと思える場所です。譬え話の終わりの方で、息子が自分の愚かさに気づき、家に帰ろうと決心した時、父は息子が「まだ遠く離れていたのに」（ルカ 15：20）その帰りを待っていたとあります。この譬え話は大事なことを明快に説明しています。私たちは時には神を遠ざけたいと思うかもしれませんが、神はいつも私たちを見ていて、帰って来るのを待っていてくださるのです。

イエスが人々にどのように接しておられたかを見ると、人々を安心させておられたことがわかります。イエスは、神が愛にあふれた父であり、私たちの求めに応えてくださる方であることを理解してほしいと言われただけではなく、イエスご自身が、友のない人の友となり、神の恵みが与えられることを伝えられたのです。自分の罪を認め、イエスの隣で死にかけていた強盗に対しても（ルカ 23：43）、イエスはそのようになさいました。イエスのご自分が来たのは「世を裁くためではない」（ヨハネ 3：17）と、繰り返し言われました。しかし、長年にわたって、あるクリスチャンたちは異なった印象を与えてきました。イエスは人々に近づき、人々を知ろうとなさいました。イエスは人々から離れて立ち、人々に罪悪感をもたせるようなことはされませんでした。今日、多くの人々はイエスのこと、その教え、その生涯について知りません。私たちが人々に与える印象が、真の愛の神を示すものであるか、それとも、それとは反対のものであるか、重要な点です。

詩編 103 編 12 節は、神が何に距離をとってくださるか、その積極的な意味を要約しています。「東が西から遠い程 わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。」神は願い求めるすべての者にそうしてくださいます。このような愛の方に距離をとってついて行くのは、もったいないことです。

考えよう

「多くの人々は『教会』から遠く離れていながら、神に近づくことを考えているのです。」

「イエスは人々に近づき、人々を知ろうとなさいました。イエスは人々から離れて立ち、人々に罪悪感をもたせるようなことはされませんでした。」

「私たちは時には神を遠ざけたいと思うかもしれませんが、神はいつも私たちを見ていて、帰って来るのを待っていてくださるのです。」

こうなりたい
役に立つ



こうしたい
あなたと神の間が離れている
ことがないようにしよう。

経験

イエスについて行く私たちが、今までと何も変わらないとしたら、ついて行くことの意味はありません。イエスについて行くなれば、私たちは変わります。自分の可能性に届こう、こういう者になるようにと造られた、その姿になろうと望むようになります。つまり、自分がついて行く方、自分の模範とするべき方、導きと力を与えてくださる方—イエスに似た者になりたいと思うようになるのです。

ある人々にとっては最初の変化は目覚ましいものです。生活の仕方が、こちらから向こう側へと、全く一変してしまうようなものです。しかし、それは最初だけです。私たちは変化し続けます。それはどうにもならないことです。世界もそうですし、私たちもそうです。同じ状態にとどまっていることはないのです。生活が変われば、その結果も変わります。私たちはそれに沿って生活し、時にはそれについていくのに苦労します。神の霊は私たちの内にあって、私たちが変化に付き合っていけるようにしてくださり、私たちが新しい経験をするたびに、私たちを変えていってくださるのです。

変化に気づかないことがあるかもしれません。友人たちもあまり変わったとは思わないかもしれません。それは、変化が静かに、目立たない仕方で起こるからです。神が私たちの内に住んでくださるその結果は、日々に、気づかない内に、ゆっくりと、自然に、現れてくるのです^{*1}。

最近、「変化」という言葉が多く使われています。変化というと、今まであったものとは違って、何か新しいもののようには考えがちです。変化は生活のあらゆる面に影響を与え、教会もその中に含まれます。時には、変化が起こるのが遅いと思うこともあり、ある時には、変化が強制されることもあります。そうなる、関係性、開放性、指導性に問題があったと言われることになります。多くの人々は、自然に発達し、発展する、共に変化していくというのは幻想だと言います。イエスは、変化を無理強いされることはありません。イエスは私たちと共に進むことを願っておられます。しかし、それを受け入れるかどうかは、私たちにかかっているのです。

使徒パウロは霊の結ぶ実について書いています（ガラテヤ5：22）。私たちの生

活の中にいてくださる聖霊がその身を実らせてくださるということです。私たちが生活の真ん中に神を迎え入れる時、私たちの内に実るもの、特性は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。この特性のうちには、自分に合うものと合わないものがある、と思うかもしれませんが、自分の好きなものだけを選んではいけません。どの特性も、少なくとも成長していくべきものであり、私たちがさらにイエスに似た者と成長していく中で、私たちがさらに良いものへと変えていってくれるのです。

使命は変化することです。状況を変える。人々を変える。世界を変える。私たち使命を行う者たちも、経験、観察、挑戦を通して、変えられていきます。他の人々と関わりをもち、目的達成のために働き、現状に取り組む時に、結果が現れてきます。

時には変化を強いられることがあります。世界的なコロナ蔓延は、物の考え方、態度、理解、安心安全についての考え方などを変えました。私たちの生活ばかりでなく、私たちが手を差し伸べたいと願っている人々の生活にも、悲惨な出来事、突然の死別、失業、不実な行いなどが入り込んできました。私たちのニーズに responding くださる神は、そういう人々のニーズにも responding くださるのです。

やみくもに変化に反対することは、あまり勧められることではありません。他の人々に出会うことは、私たちの視野を広げ、人々への理解を深め、ある人々がどうしてそのように考えるのか、または、彼らが変化することを嫌うのはなぜかを理解できるようになるのです。私たちが神の導きに従っていくなら、自分たちの態度や、考えや、思いを捨て去らなければならないことに気づきます。そのような進化なしに人生を歩むことはもったいないことです。

本来、使命への召しは、生活を変えていくことです。状況や環境を変えることです。私たちの人生のあらゆる面に影響を及ぼす召しを受け入れることです。ペドル大將が言うとおり、備えをし、困っている他の人々と関わりをもち、どんな時にも責任を引き受けることなのです。もう一つ、忘れてはならないことがあります。それは、私たちが使命に携わるときにイエスに自分を変えていただ

き、主に仕えるにふさわしい者としていただき、もっと主に似た者としていただくことです。この経験を見落としてはなりません。日々に、です。

考えよう

「神の霊は私たちの内にあって、私たちが変化に付き合っていけるようにしてください、私たちが新しい経験をするたびに、私たちを変えていってくださいのです。」

「私たちが神の導きに従っていくな、自分たちの態度や、考えや、思いを捨て去らなければならないことに気づきます。」

「それは、私たちが使命に携わるときにイエスに自分を変えていただき、主に仕えるにふさわしい者としていただき、もっと主に似た者としていただくことです。この経験を見落としてはなりません。日々に、です。」

こうなりたい

自分自身を変えて
いただく



こうしたい

神が導いてくださるところに
心を開いて従う。

終わりに

どんな旅にも終わりがあります。通常は計画された目的地があります。イエスとの旅はそのようなものではありません。神の言葉にあるように、イエスはアルファであり、オメガであり^{*1}、初めであり、終わりなのです。それに加えて、イエスご自身が道であると言われました(ヨハネ 14:6)。ことに、この旅の目的はイエスご自身であり、イエスを知ることであり、永遠にイエスと結ばれることなのです(ヨハネ 16:17~23)。イエスは永遠について話されるとき、「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」(マルコ 10:31)と言われました。イエスは弟子たちにこう言われました。本当に大切なのは人を押しのけて自分を前に出すことではなく、どのようにしたら他の人々に先に場所を与えることができるかを知っていることだと(マルコ 9:35)。この旅は驚きに満ちているのです。

人生は競争ではありません。誰が最良のクリスチャンか、誰が最もキリストに似た者かなどということではないのです。そのようなことを目的にするのは危険です。単純に神の御心^{みこころ}を行うという、大切な目的と矛盾します。使命への召しを受け止めるとは、できるだけ多くの人々を、イエスが神の国^{むじみ}と言われたところへ導き入れる手伝いすることなのです。「ナンバーワン」になろうとすることではありません。

これはイエスが奉仕をする点で強調されたことです。イエスに従う者たちは、人々を力づくで引っ張るのではなく、優しさ^{けんそん}と謙遜をもって導くのです(マタイ 11:28~29)。イエスご自分に従う者たちに霊的な権威をお授けになりました。しかし、それは恵みによって与えられたのであって、自分たちの個人的な目的のために用いるべきではないと強調されました。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」とイエスは言われました(マタイ 10:8)。イエスが与えた権威は仕えるためであった、そして今でもそうなのです。

そうではあっても、私たちが神と正しい関係にはないと気づくなら、霊的権威は弱められます。間違った態度や、二枚舌を使うこと、不純な動機などで自分自身を隠してしまうなら、私たちのうちに働く神の力を感じて喜ぶことなどできません。結果は失敗に終わります。自分の生活すべてを、神とその目的に

委ねていると知ること、これに代わるものは他にありません。私たちはこのメッセージを共に分かち合うことを恥じてはならないのです。

イエスの導きに心から応えようとしても、私たちの信頼には限界があることを認めざるを得ません。信頼は育てていく必要があります。信仰を働かせることによって、初めて、信頼の価値が証明されるのです。近道はないのです。

人々に福音を理解してもらう手助けにも、近道はありません。悲しいことに、人々が今いる所で彼らに会い、彼らにわかる言葉で話し、彼らの靴を履くことがどんなことなのかを想像する、そういう努力をしないことが多いのです。イエスは地上に來られた時、私たちの靴に足を入れ、私たちのいる所で私たちに会ってくださり、私たちにわかるようにはっきりと、明快に語られました。福音書を見れば、イエスがそのようにして生き、私たちと関わりをもってくださいることがよくわかります。イエスは宗教上の言葉や、教理の言葉で人々を困惑させることはありませんでした。それはすべて、隣人を愛することの表れでした。山上の説教(マタイ5～7章)でイエスが強調された生き方だったのです。イエスは、愛が宗教上の儀式よりもっと大切であることを繰り返し示したのです。

アルバート・オスボーン大將は、主の弟子として歩む私たちを豊かにする歌をたくさん作った方ですが、その中には人生の旅について歌ったものが多くあります。英文『救世軍歌集』79番「私はあなたがどういふ方か知っています」(『救世軍歌集』31番「重荷を負い心くじけ」)の中で、自分の歩む道の上に、イエスの足跡があるのに気づいた、と書いています。続いてその歌を見ていくと、イエスが、最初是一緒に歩いていたのに、少し先を歩いてくださる、ついにはイエスが導いてくださる。そして、私たちは最後の第4節を私たちの祈りとするのです。

心かえず まことつくし
十字架の道 行かせたまえ
ついにはわが主に
み国にてまみえん

(英語詞直訳)

私を引き戻したり、私の心をあなたから引き離すものはありませんように
カルバリへの道を進ませてください
そして、ついには、神の宮、うるわしい都に着き
そこに私の名前が書かれているのを見ることができますように

使命は完了しました。

考えよう

「人生は競争ではありません。誰が最良のクリスチャンか、誰が最もキリストに似た者かなどということではないのです。そのようなことを目的にするのは危険です。」

「ことに、この旅の目的はイエスご自身であり、イエスを知ることであり、永遠にイエスと結ばれることなのです。」

「私たちが神と正しい関係にはないと気づくなら、靈的權威は弱められます。間違った態度や、二枚舌を使うこと、不純な動機などで自分自身を隠してしまうなら、私たちのうちに働く神の力を感じて喜ぶことなどできません。」

こうなりたい
その場所

こうしたい

神があなたの求めに従って与えてくださったように、神からいただいたものを他の人々と分かち合おう。

注 及び 参考資料

はじめに

p.9 1. さらに詳しく知るためには、万国本営出版『「キリストのからだ」における救世軍』を参照。

イエスからの召し

神を知る

p.16 1. 福音書に記録されているとおり、イエスが神について何と言われたかを学ぶ時に、神は私たちを造り、世話をし、支えてくださるということがわかります。ヨハネによる福音書にある、「わたしは…である」の言葉、山上の説教（マタイ5～7章）、ヨハネ17章にある祈り、神についてのその他の教えなどは、誤った考え方（マタイ5：21、27、31、33、38、43）を正すために、または、確かめるために、イエスが故意に話されたのです。例えば、イザヤ61：1、2とルカ4：18、19の相違に目を留めてみると、神が報復される日という言葉がなく、神の世界全体に対する前向きの気持ちが表されています。また、イエスが宗教指導者や学者たちに向けた非難の言葉に目を留めましょう。彼らは神が求めておられることを曲解し、人々に負担となる教えを押し付けていたのです（マタイ23：2～4）。

自分自身を知る

p.19 1. プラトンの「洞窟の比喻」にあります。ソクラテスが不信心と若者たちを墮落させるという理由で、裁判にかけられた時に、引用した言葉です。
p.19 2. 次の聖句を見てください。「人間の道は自分の目には清く見えるが主はその精神を調べられる。」（箴言16：2）「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。」（エレミヤ17：9）

自分の使命を知る

p.22 1. ワンアーミー（ひとつの救世軍）シリーズ1『はじまり かけがえのない命』『かけがえのない命を生きる』参照。

p.22 2. 「私は戦う」

今日そうであるように、婦人たちが泣くかぎり、私は戦おう。

今日そうであるように、幼い子供たちが飢えるかぎり、私は戦おう。

今日そうであるように、男どもが刑務所に入出入りするかぎり、私は戦おう。

酔漢が残っているかぎり、

街頭に哀れな失われた娘がいるかぎり、

神の光を受けない一人の暗黒な魂でも残っているかぎり、

私は戦おう—私はまさに最期に至るまで戦おう！—

（ウィリアム・ブース）

p.22 3. 英文『救世軍歌集』935（「社会の隅できずつき」）

p.23 4. 例えばヨハネ4：1～30、ヨハネ8：2～11、ルカ19：1～10

備えよう

祈り

p.26 1. 詩編103：13

p.26 2. 儀式に関する事柄や、クリスチャンにとって欠くことのできない事柄については、万国本営出版の『ワンアーミー』シリーズのために書かれた『主の御手のなかで』(*In the Master's Hands*、ロバート・ストリート著、邦訳未)に詳しく書かれています。

p.28 3. ローワン・ウィリアムズ著“*God with Us*”にこうあります。「祈りは、『私たちが自分の内に神を招き入れること』です。聖霊が私たちの内に生き生きとしたキリストを宿らせてくださり、そこが真にキリストが存在してくださる場となります。聖霊が私たちの内に来てくださり、キリストが私たちの心の内に生きてくださるのです。」

きよめ 聖潔

p.30 1. 『包み隠さない聖潔』(*Holiness Unwrapped*、ロバート・ストリート著、邦訳未)という本の中にこうあります。イエスは「文字どおり、神を地上に引き下ろしてくださった。そして……きよい生活がどのようなものであるかを、人間の姿で示してくださった。イエスは包み隠さない聖潔であった。」そして、さらに、もっとイエスに似た者となって生活できるよう私たちを導く鍵は、

関係性にある、とイエスが強調しておられることを、この本は説いています。

p.30 2. 救世軍はその初期の時代から、私たちと神との関係を深く知り、霊的経験に深みを加える、数々の祈りの歌を用いてきました。救世軍には、神と会話をするようにと招く数々の歌をつくった人々が多くあります。例を挙げてみます。(以下、SASB は 英文『救世軍歌集』〈2015 年〉を指す)

若者

SASB 674 (日本語版『救世軍歌集』になし)

救い主よ、砕かれた私の心を あなたに委ねます

すべての力をあなたに委ねます

あなたは、わたしにとって唯一の方 (ジョン・バートン Jr.)

弟子

SASB 670 (日本語版『救世軍歌集』になし)

あなたに従う者とならせてください

とこしえにあなたに仕えさせてください (ジョン・ブルース)

献身

『救世軍歌集』225 番 3 節 われ主にしがたい 主をのみあいせん おさなごのごとく ただ主にすぎる… (アルバート・オスボーン)

瞑想

SASB 595 (日本語版『救世軍歌集』になし)

この静かな時 御座の前で黙し あなたの臨在に触れ

あなたを知ります 私が知られているように

この静かな時 私の霊を解き放ち

この静かな時 私を良き者に変えてください (ジョン・ゴワンズ)

戦う備え

p.33 1. 長年の研究と調査によって、はっきりとわかってきたのは、大多数の娼婦たちが子どもの頃から虐待され、しかも一人の人だけによるのではないことです。

p.34 2. 聖フランシスコが実際に、「言葉も用いよ」と言ったとする意見を同じくする人々がいます。— 実際の模範と言葉との両方を強調しているとする解釈です。

p.35 3. イエスが急がされたり、狼狽させられたりすることを拒まれた例は、次の箇所に見られます。ルカ 8:40 ~ 56、ヨハネ 7:3 ~ 6、ヨハネ 11:1 ~ 6。

関わりをもち、取り組もう

奉仕

p.38 1. 僕というものが弱さを表すのではないことが、『仕えるリーダー』(*Servant Leadership*, ロバート・ストリート著)の中に書かれています。

p.39 2. 救世軍の礼拝で歌われる「仕えること」に関する数多くの歌は、救世軍の働きに感化を与え続けています。日々、仕えていく、という歌をいくつか挙げてみます。

『救世軍歌集』コーラス 5 番

イエスをあいし いのりもて 日々 主イエスにしたがいて つかうるすべ おしえませ

『救世軍歌集』243 番 3 節 この時代に つくすために ちからのかぎりを われはもちいん (チャールズ・ウェスレー)

SASB 617 4 節 (日本語版『救世軍歌集』になし)

何にもまして、主のしもべになりたいのです 主のくださる懲らしめは、最高の栄光 主の御心をを行うことは、最高の栄誉 (エドワード・ヘンリー・ジョイ)

『救世軍歌集』241 番 1 節 わがもてるすべてを 主のみ前にささげん… (アリス・エドワーズ)

SASB 670 (日本語版『救世軍歌集』になし)

あなたに従う者とならせてください とこしえにあなたに仕えさせてくださ

い 雲の日も、晴れの日も 御顔を仰ぎ見る日まで 主よ、わたしはあなたのもの (ジョン・ブルース)

『救世軍歌集』240 番 1 節、コーラス わがためののちを 主はあたえませり われなにをなして 主につかえまつらん
主の十字架のもとに 伏して祈るわれを み^{たま}霊もてきよめて 主につかえしめてよ (ブラムエル・コールズ)

SASB 613 (日本語版『救世軍歌集』になし)

イエスに最後まで仕えたと約束しました とこしえに私のそば近くにいてください 私の主、私の友よ あなたがそばにおられるなら 私は戦いを恐れませんが あなたが導いてくださるなら 私の道は迷いません (ジョン・アーネスト・ボード)

SASB 592 (日本語版『救世軍歌集』になし)

私の貧しい魂が 主の大きな栄光を生きるために 行い・言葉・思いをきよめて あなたに仕えさせてください ありのままの私をお取りください (チャールズ・ウェスレー)

SASB 692 コーラス (日本語版『救世軍歌集』になし)

あらゆるすべてにまさって 主に仕えることは私の喜びです (ルース・トレーシー)

SASB 667 (日本語版『救世軍歌集』になし)

主よ、あなたと共に歩ませてください 謙遜に仕える道を、自由に進ませてください あなたの秘義を教えてください 思い煩いと苦しみを担えるように わたしを助けてください (ワシントン・グラッデン)

SASB456 (日本語版『救世軍歌集』になし)

主よ、人類の父よ愚かな私たちの歩みを赦し 正しい心を与えてください きよい生き方をもって 主に仕え、主を畏れ、主を賛美させてください (ジョン・グリーンリーフ・ホイッティア)

『救世軍歌集』263 番 1 節 み神の秘めたる み座にちかづき 愛のかぎりもて さんびをささげ…

3 節 わが主をまちかく さやかにおがみ みひかりうけつつ われもかがやかん わが主をみいだし わが主につかえ わが主とまじわる さちぞたえなる (アルバート・オスボーン)

『救世軍歌集』225 番 1 節 十字架の重荷によろめくときも めあてをうしない さまようときも 主よあわれみもて われをささえて みわざにいそしむものとならせよ

3 節 われ主にしたがう 主をのみあいせん おさなごのごとく ただ主にすがる あつきおもいもて ころをそそぎ 主につかえまつらん いのちのかぎり (アルバート・オスボーン)

SASB 750 (日本語版『救世軍歌集』になし)

4 節 主の愛が与える務めには 私の心を縛るものはない 私の心は主の秘義を教えられ 私は解き放たれ、神の子の自由にあずかる 愛のゆえに自分を捨てること それこそが自由だ (アンナ・レティティア・ワリング)

p.40 3.『仕えるリーダー』(*Servant Leadership*、ロバート・ストリート著)はイエスを最高の模範としています。

礼拝

p.42 1. 私たちが生き方を通して神を礼拝するということは、万国霊的生活委員会の「礼拝への招き」の中心に据えられていることです。また、『神の呼びかけ～神の民となるために』(*Called to be God's people*) (2019 年から『ときのこえ』に翻訳連載中)にもさらに詳しく書かれています。

p.42 2. コロナが世界中を覆っている時に、礼拝の方法として、オンラインによるものが導入されました。さらに多くの人々に礼拝が届けられるよう、新しい工夫が続けられています。

確信

p.46 1. ジョン・ゴワンスはこのことを、彼の歌「人に理解してもらえず」(『救世軍歌集』116 番 2 節)の中で述べています。

こどくやいたみに苦しみ すてばちになるときにも
やさしい人の手をとoshi 望みあたえてくださる

任務を果たそう

すべての世代の人々を養い、育む

p.50 1. 万国本営出版の本『幾世代にもわたって』(*From Generation to Generation*, ロバート & ジャネット・ストリート著、邦訳未) には、世代間で互いに支え合って、繋がっていく姿は、そのルーツが聖書にあり、そのことがこの世界に対する神の御心である、と書かれています。世代を超えた人々が一緒にこの本を読むことができれば、大変有益であると思います。

p.50 2. 『幾世代にもわたって』では、変化の速度が急速であることを強調しており、そのために生活の仕方が世代間で劇的に変化しており、全く異なっていることを示しています。

p.50 3. 『幾世代にもわたって』の「亀裂 (*Stretch marks*)」の章を参照。

p.51 4. ジュニア・ソルジャー制度や救世軍の働きに寄与してきた土台については、『幾世代にもわたって』の「私を造りかえてください (*Mould me*)」の章を参照。

犠牲を伴う愛

p.54 1. 癒しに関しては次の箇所を参照。マルコ 1:40 ~ 42、ヨハネ 11:38 ~ 44、ヨハネ 9:1 ~ 7、マルコ 7:31 ~ 37、マタイ 11:5。

p.55 2. ワンアーミーシリーズ 12・13 『希望／愛』 「愛の代価」を参照。

p.55 3. これもワンアーミーシリーズ 12・13 『希望／愛』 「愛の代価」を参照。

p.56 4. ワンアーミーシリーズ 12・13 『希望／愛』 「救世軍と希望」を参照。

すべてを包み込む

p.59 1. レイダー大将はこのことに関して、2015 年の出版物の中で「この救いの日をつかみ取るために」と題して語っています。

p.60 2. 救世軍の万国的なミッションステートメント「万国的ムーブメントである救世軍は、公同のキリスト教会における福音主義を代表する一派である。そのメッセージは、聖書の基盤に立ち、その働き (ミニストリー) は、神の愛

に動機づけられ、その使命は、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、主イエス・キリストのみ名において、分けへだてなくすべての人々のニーズに応えることである。」

日々に

出発点

p.62 1. ペトロがこの大事なことを理解できるようにと、イエスが助けてくださっていることがヨハネ 21:20 ~ 22 を見るとわかります。

p.62 2. 詩編 139:15 には、神がすべてをご存じであると書かれています。

距離

p.65 1. 善いサマリア人の話 (ルカ 10:32)

経験

p.68 1. 私たちが日々に造りかえられていくことは、コリント二 3:18 に書かれています。

終わりに

p.71 1. 神は最後の時のご自身のことを、このように語っておられます。ヨハネ黙示録 22:13

日々に 使命への召しに応えて

2022 年 10 月 初版第一刷 発行

非 売 品

著 者 救 世 軍 万 国 本 営

発行者 スティーブン・モーリス

発行所 救 世 軍 本 営

〒 101 - 0051 東京都千代田区神田神保町 2 - 17

TEL 03 - 3237 - 0881

© 救世軍本営 2022 Printed in Japan